

世界の歡樂郷巴里

藝術家は音楽、繪畫の殿堂、美のユートピアと呼ぶ。史學者は、ヴルサユー宮殿の一つに數十日を費すであらう。或は庭園學者なら、此の大都市そのものが既に近代庭園圖になつた理想の大公園だと讚賞を惜しまないであらう。否、如何に心なき漂泊の旅人と雖も、恐らく其の飢へたる腹をも忘れて、歡樂の明るさに陶醉するであらう。

巴里— PARIS あ、何んと云ふ明るい華やかな響であらう。

マロニエ、プラタンの綠樹立ち並らぶ街路、澄み切つた空の光りとなるエツプエル塔、清冽として、而かも悠々と流れるセーヌ河、私達は歴史を忘れ、現在と未來との時間をも超越し、尙且つ其れを色彩の幾百幾千の享樂機關の存在を全く除外しても、只之れだけで巴里から受ける美の享樂氣分は世界の何れよりも多い事を知るであらう。巴里の名は餘りに華やかであり、餘りに有名である。遠い昔の希臘、羅馬の文化は、其の残されたる遺跡や遺品、さては書籍やカンパスの上に於て、其の爛熟したる盛華を想像するに過ぎない。だが巴里は、現實である。現實に於

ける希臘、羅馬の文化の粹を集めた繪巻物である。歡樂の映畫である。

マロニエの新緑に夕風のそよぎ出る灯の、シャンデリエを行く時、如何に心なき者でも己の足どりの次第に軽くなるを覚え、高らかに口笛を鳴らし、音楽家のみの味ふ氣分を知らず知らず受けるであらう。

エトワールの門の上に又は、ノートルダム塔の上に否、空の星さへ掴み得られやうと思はれるエツプエルの塔上に登つてその世界の大公園を見下ろす時は必ず詩の三味境に浸ることであらう。

灯の海モルマントルの夜を飾る凡百のオペラ、テアター、カフェーが織りなす、世にも、輝かしい享樂のアトモスフェアは、世界の旅人を——して正に、かの美、享樂派の詩人小説家オスカーワイルドをして叫ばしめた「悲哀のない都」を如何にも強く肯定せしめるものである。だが、巴里人は云ふ。「巴里は世界の旅人の歡樂場である。眞の巴里人は、只その旅人のポケットから如何にして、金貨を落さしめやうかと努力する忠實な給仕に過ぎない。眞の巴里人は、夜は八時に臥床して朝は四時に起き出で、忠實に働いてゐる」と云ふ。世界の旅人が一年間に厭

洲へ落とす金は約十億だと云ふ。その三分の一が都市巴里であると云ふから、物凄極みではな

いか。

此の意味に於て、巴里は世界の歡樂郷否、世界の旅人の享樂場だと始めて云へる。歡樂には女の離れ難いもの著者に最も多くの興味と題材を與へて呉れた事は、讀者の想像におまかせしやう。

接吻の中毒

米國や英國では公園に、曠原に犬のやうに轉つてゐる男女に嘔吐を催したが、巴里では堂々と街路の上で、電車や、バスの中で、人前も憚らずビシユビシユと音たて乍ら接吻してゐるのには中毒させられる。

シヤンゼリゼーやモンマルトルの人混みのなかで、或は歩き乍ら、立ち止まつて、抱擁し合ひ或は二匹の蜻蛉のやうに唇をつけてゐるのがある。電車や地下鐵道のカーの中で釣革にぶらさがり乍ら呑ん氣な接吻をしてゐるのがある。暮れ方のルーブル博物館附近の河畔やエツフェル塔

欠

欠

夕のセリセンヤシ

々々を見てゐるあまたの客、あゝもし此の時「歐洲戦争は何時頃でしたかね」と問へば「さうですね十九世紀末頃でしたせう」と答へるであらうほどに長閑な顔を並べてゐる。

だが、此處を通る人々の服装に氣をつけて見るがいゝ。夕陽が凱旋門の中央から最後の赤い血を吐いて消えると、一せいに灯に輝く歩道を、ゆつたりと、山高帽に、タキシード、シルクハットに、イブニング、おゝなんと云ふ洒落な服装であらう。片手にステッキと手袋、片手には？眼さむるばかりの夜會服、流行の粹を集めた装身具に輝やいた、花のやうな婦人の腕をとつて、ゆつたりと大股に行く紳士。



佛蘭西の優美舞臺

一口に巴里人は云ふ。「シヤンゼリゼーはブルジョアの通り、モンマルトルはプロレタリアの街」と。此の上品で落付いたシヤンゼリゼー。

屋上廣告のイルミネーションは風致を害すると云つて流石、美術の國の市長だけあつてこの通りだけは、けばくしい電氣裝飾を許可せないと云ふシヤンゼリゼー。

だが此處にも流石に夜の帷が降りて行くと、カフェーに街路に紅頬青黛の怪しい女が現れて来る。だが、その服装から見ても彼女達は高級である事が知られる。彼女等は、街路に立つてゐても決して、

「今晚」

ともハローとも云はぬ、彼女達は如何にも、立派な淑女であるかの如く装つて快活に靴を鳴らして往來してゐる。カフェーのテーブルに居る彼女達も亦、決して物欲しさうに外を見てゐるない。悠然と烟草などふかして戀人を待つてゐる女の如く装つてゐる。グランドオペラの歸り途、とあるカフェーに寄つて、コーヒーを呑んでゐると、隣の卓にゐたそれらしい女から、

「オペラの歸りですか」

と問はれた。私達の服装——其晩はタキシードを着けてゐたから——に依つて察したと見える。さうだと答へると、彼女は、オペラに於ける此のシーズンの劇に就いて熱心に話した。私達の見たファーストに就いて其の主役のチャルロ、トララードや監督ゴードの演技に就いて可なり詳細に批評した。彼女の頬はそれが爲めにほてり興奮に其の瞳は輝いた。だが私達は別に彼女の最後の要求はとう／＼聞かなかつた。

「恐らく彼女は私達旅行者に巴里を紹介する一人の教師を以て任じてゐるのかも知れない。だが、彼女は自分からはとう／＼口に云ひ出さなかつたけれど、僕達から何處かへ行かうと今に云ひ出したらうと待ち構へてゐた事は事實だ。」

歸り途で私達は斯う話し合つた。之れが、シヤンゼリゼーの夜を色彩する高等内侍である。

S 老人のロマンス

「僕は、古今の佛蘭西珍畫を買ひ集めて歸るな」

實業家のM氏は云つた。

「僕だつたら、毎日三萬法宛費つて、毛唐共をあつと云はせて見せる。」

政治家のK氏は太腹だ。

「俺なら、ダイヤの王冠を買つて日本への土産にしやう。」

謹直なY氏は云ふ。

「素晴らしい美人を十名ほど連れて日本へ歸つて、そいつ等を妾として豪奢に暮して見たい。」

好色家のI氏は何處迄も女の話にする。

暖爐は赤い焰を見せて盛に燃えてゐる。それをおつとり巻いて、安樂椅子の圓陣である。外はチラ／＼と粉雪を散らす寒い晩、話題は誰か云ひ出した「此處は千萬法の金があつたら」と云ふのに答へた無邪氣ない空想談である。

日本では明治の新政となつて間のない千八百八十年頃——處は巴里のとあるカフェーの隅、集まつた連中は、當時日本から留學した最初の人達。

其處へ遅れ馳せに這入つて來た白哲紅頬の貴公子S公爵。

「僕だつたら、その金で一牛巴里で暮して、日本へ歸らない。」

と、事もなげに云つた。其の席に居たS老人——否その時は未だ三十にもならない血氣の青年將校であつたS少佐——は、其の簡單で而かも要領得たS公爵の明答に思はず、

「さうだ。俺だつて日本へなんか歸るもんか。」

と、心に強く呟いた。だが、それから二三年、その座にゐた人達は皆、その千萬法を夢にも實現せずして、夫々業を修めると日本に歸つて行つた。さうして、又新しい留學生が來ては去り來ては去り何時知らず日は立ち年は暮れ、星霜此處に五十年、遂にS少佐だけは空想の千萬法を握らずしてS公爵の言葉の如く「永遠に巴里に止まる」人となつてしまつた。

而かも、I氏の云つた「美しい巴里女」を妻として。

若い好男子のS少佐には、あの時既に美しい金髪小女との間に戀があつた。だが、その燃ゆる戀の焰も、所詮破れなければならぬ機會が來た。少佐は砲術研究に日本政府から派遣された留學生であつた。業を終へると彼は日本へ歸り、其の新智識を國家に酬ひなければならぬ義務があつた。流石に武骨の少佐も、次第に歸國の日の迫るのを云ひ出し兼ねて日々獨り焦慮をつゞけ

好色家

た。遂に其日が来た。この世もあらぬ程に泣き濡れて伴に日本へ行くと云ふ戀人を訓して「必ず迎ひに来る」と云ふ其場限りの氣安めな言葉でやつとなつとくさせ、少佐はしほくと巴里を去つた。マルセーユから日本行き佛國船に乗り、彼女の幻影を未だ眼の前にし乍ら少佐は寂しい船窓から北の空を何時迄も懐しんだ。船が伊太利のナポリに着いた。すると少佐を尋ねて一人の佛蘭西少女が來たと云ふ。それは、彼を慕ふの餘り汽車で遙々五日の長旅を厭はず後を追つて來た戀人であつた。其の可憐な姿を見ると、少佐も心を決せず居られなかつた。

さうして遂に日本への總ての義務も責任も、斷然放棄して、再び戀人の手を執つて、巴里に引返したのである。かくして軍服を脱いだ一介の青年Sと、彼女との新しい生活は始められた。時移り、人は去り春風秋雨此處に五十年、昔日の戀の勝利者も今は白髮童眼の好々翁となり、「巴里の主」と云はれ、日本から巴里に旅して行く人々の面倒を見てゐる。

モンマルトルの歡樂

モンマルトルの宵は十時から始まる。



者行旅と女路街のトルマンモ

カフェーと、テアターとキャバレーと、ミュージックホールのみの街と云つていゝモンマルトルは世界にない夜の歡樂郷である。巴里中の否、世界至る處の歡樂場に人が次第に散つてゆく十二時頃から、モンマルトルは人出を増し、二時三時はその最も賑ふ時である。朝の日は、薄紅にマロニエの樹の間を射す頃になつて初めて人の影を見なくなつて來る。その群衆は何者か？ 世界の隅々から集まつて來た旅人と、之れに媚を賣る魔性の女と又その影につきままとふ無頼漢と、たゞそれだけ

である。

カフェーと云ふカフェーは、大小に應じて夫々ジャズバンドを設け、その狂騒に近い音楽を街

路に放出して道行く人々の心を彌が上にも高潮せしめる。ミュージックホールや活動館のイルミネーションは怪奇な光りを空に地に織りなし、人は只、その喧騒と光りの波にうごめく虫とも見られる。その光りの波を巧に泳ぎ乍ら或は、

「今晚は」

を浴せ、或は、

「烟草の火を貸して」

と男を呼び止める紅頬の女は未だ駭し易しいとしても、

「何處へ行く」

といきなり寄り添つて腕をからむのや、

「妾を好かない。」

と首すじにがじりつくのは、餘りにも端的で驚かされる。

赤い風車の廻る屋根のムーランルージュは、ガジノ、ドバリと共に巴里に於ける、否、世界に於て餘りにも有名過ぎるミュージックホールである。赤いモーニングの案内人に案内されて、正

面の赤い階段を上つて赤い廊下に行く。總てが眼の痛いほど赤い色彩である。廣いホールで、右側が舞臺と観客席左側はそれと殆んど同じ大きさの酒場となつて幕毎に休む人達の爲めに、別に中央のジャズバンド、それもことごとく女の樂師である——が、賑かに吹奏する。

「レビユー」の女王として人氣を一身に集めてゐる、名女優ミスタンゲットが有名なバレンチアを其の流行から一年も續けて演じてゐるのである。舞臺に現はれる數十人の乙女がその裸體に銀系寶玉の綺羅を纏ひ、爛然たる宮殿にも紛ふ舞臺に、怪しくも妙なる音楽につれて踊る様は私達をして遠い中世紀時代の華かな藝術殿堂に誘ひ行く。

幾多のレビユーのなかで殊に心を引かれるのは、タンゲットの演じた「街路女」の一幕であつた。彼女自ら豆賣に扮して酒場の前で旅人に夫れを賣るのであるが彼女が、モンマルトルの街路女から出た者である事を聞いてゐた爲めか彼女の演技としては、寧ろ、革命劇中のチヨセフキンなどに扮したものより遙かに優れてゐたと思つた。彼女は亦、その得意の「バレンチナ」を唱つて舞臺から花を投げた。五十餘歳の老女優であり乍ら、あの若い娘に成り切つた彼女の若さを買つてやりたいと思ふ。だが一體、どう慾目に見ても罎口で、鼻の低い彼女を美人とは云へな

い。さうして、決して彼女の姿態は美しくない。其の聲も破れ鼓を叩くやうな濁み聲である。それでゐて、あれほどの人氣を一身に集めてゐることは一種の驚異に他ならない。只彼女は、彼女の天才——演技そのものに依つて、その位置に在ると云へやう。

劇がはねると酒場が開かれる、観客の多くは酒場のテーブルに着いて夜明迄今度は自分達が踊り狂ふのである。烟草や女優の寫眞帖のやうな物を盛んに買りに来る、観客と見せて這入り込んだ多くの喜媚の女が、踊りの相手を求める。酒を飲まして呉れと来る。

だが、巴里の寄席には亞米利加に在るミュージック、コメデーのやうな猥劣なものがない。布哇土人の尻振りダンスを真似た性慾的な感じを生命とする、下品な亞米利加物に比べて、何んと云ふ優雅な原始的舞臺であらう。最も下品だとせられてゐる。クーガン座なども、なるほど寄席そのものは小さくて汚い感じがしたが、裸婦の踊りにしても、或は身に一物もつけず向ふ向きになつて『イブとアダム』の神話劇を演ずる舞臺でも、観客に少しも下品な氣持を起させるやうなことはない。

けれども所詮、モンマルトルの夜を行く時は、必らず歡樂につきまとい一種の哀愁を感じず

には居られない、恰も世紀末に似たデカタンの悲哀である。羅馬やボンベ一の滅亡を思ふ時、しめやかに心を打つものがある。一人モンマルトルばかりでなく巴里が、否歐洲全體の將來か？

神よ忘れて下さい

「呀つ、綺麗だな。」

S 君は叫ぶと立ち止まつて凱旋門の上空を仰いだ。だが、ふりむいた私にはその空に輝く星より見えない。

「何がある。」

「火の帯だよ。空に流す火の布だ、エツフェル塔のイルミネーションさ。」

「なるほど。」

「今に現はれるから見給へ、素晴らしいぞ。」

「さうか、一つ此處に掛けて見物するとしやうかな。」

二人は側のベンチに腰をおろすと、その空を見つめて待つた。

「呀ッ、やり出した。青か、いや紫になつたぜ、今度は赤か。」

蒼く澄んだ空の彼方にばつと火の樽を見せるとそれが忽ち、青く、紫に、黄に、赤に、ばつと消えると再び青い水のやうに流れる。下から次第にそれが消えると、赤い掃のやうに、忽ち紫に、黄にさうして再び消へて行つた。

「花火だね、まるで。」

「玉屋つと云ふ處だ。」

二人は感謝し乍ら尙も次の灯を待つた。その時、

「今晚は紳士」

と二人の肩で優しい聲。

「濟みませんが、巻煙草下さらない。」

私達は顔を見合せたま、答へない。

「貴方達。英語が話せますか」

今度は英語で来た。しかしそれも變んなアクセントである。

「否、否」

S君は手を振つた。斷る時は之に限る。英語も話せないのか、間拔けた日本人だとも思つたらう、變んな笑を残すとすたくと向ふへ去つて行つた。黒の罽毬帽子を眼深く冠つた後姿のいゝ女である。

「又あんな奴に取つかまるといけなから歸るとしやうか。」

二人は腰を上げた。私達は、ワグラム街の活動を見ての歸り途なのである。凱旋門を中央に幾筋も放線状に開かれた道、幾度來てもまぎれ易い道である。それを、すつとと過ぎて行く自動車に足を止め乍ら、横ぎつては其處に立てられた道標を仰いで。やつとデ、アナ街を発見した。流石に十二時を過ぎると、シャンゼリゼーさへ人影も稀になつて、プラタンの樹影をしょんぼりと立つた街燈は夜更けの廣場を照らすばかりである。すると行く手の赤い圓錐形の廣告塔の影に二つの男女の影、近づくに従つて次第に判明したが、女は正しく黒い罽毬帽の最前の街路女で、男は髯の白い老人である。

「おや、變だぞ。」

S君は聲を秘めた。なるほど變だ。遠くではつきりとは見えないが、女はどうやら其短かいスカートを手にして何ものか男に見せてゐるらしい。

「スタッキングに金を入れてゐるんだらう。」

と私は苦笑したが、急にそれに腫を注いでゐる私達が淺ましくなつて來た。

「行かう。」

と、S君を向ふ側の歩道へ誘つて急いだ。すると折よく向ふから靴音高く一人の警官がやつて來た。二人の影は動き初めて樹影の暗に消へて行つた。

「嫌になつてしまふな巴里と云ふ處は。僕は此處で一年ゐなければならぬが、もう夜更けて歩かない事にしやう。」

S君は、憤慨とも戯談ともつかぬ口調で云ふ。

「聲を掛けられるのはいいが、見せつけられるのが嫌と云ふ譯かハハ……」

二人は無邪氣もなく笑ひ乍らやがて十字街に出た。其の角を曲りかけた利那、
「呀つ。」

二人は同音に發すると棒のやうに立ち竦んでしまつた。(二十五字削除)

曲つた角の大きな建物の扉の下に塊まつた黒い影、畜生！ 下道奴！ (十五字削除)

お、神よ。私達の腫を潰して下さい。せめて此の醜い私達二人の姿を今宵限り忘れて下さい。

オー神よ、神よ。

くるりと身を翻すと、一さんに元來た道へ引返して行つたのである。

セツクス座談會

場所は、Sホテルの一室、卓を圍んでコーヒを飲み乍ら、話すは醫學博士のA氏、新聞記者のO氏、B會社支配人のE氏、畫家のM氏、案内者F君とさうして私。今下の食堂で夕飯を終つたばかりである。案内者F君を除いて他は皆最近巴里を訪れた、旅行者である事を承知して頂き度い。

O「するとやつぱり、佛蘭西女が一番美しくないと云ふことになりましたかな。」

M「體の均整がとれてゐますね。皮膚の色もいゝし。」

私「亞米利加女は餘り大き過ぎますね。脚だけは長くて綺麗ですが、實際僕は五尺六寸あります。が亞米利加の殊に南部地方では、僕等が見上げる様な奴がゐますからね。」

E「いや亞米利加女は御免だ。あんな我儘な女の事を思つても癪だ。」

O「何うして、すか何か、あつたんですかハア……………」

E「接した時の気分だね。英國の女は、實に親切だ。日本人を理解してゐる。最も先輩がよかつたからでもあらうが、日本人と云へば全く紳士だと思つてゐるから愉快だ。だが英國の女が一番高いと云ふことだが事實だらうか。」

A「親切な點は獨逸女が一番でせう。人種觀念を超越するのは獨逸人の特徴のやうです、だが獨逸女は實際性的です。本能のまゝに戀を求めると云つた風です。大戦のために男兒の少い勢も

あらうが伯林等では二十五歳以下で結婚するのは餘程金持ちか、秀れた美貌の持主だけださうです。それで獨逸女の處女性性は十三歳位で失はれると云ふから驚くぢやありませんか。」

Mlle. Luzy Dupin
Hotel Pratic
31 Rue german Belonzy
Place Foyette Paris 18-

ソイサの女西蘭佛

M「性的な點では佛蘭西女が代表的ぢやないんでせうか。」

A「さうです。然し、此の國の女は性の遊戲に厭いてゐると云ひますね。つまり此の點では普通の女性でなく病的です。尋常一様の性の戯れでは満足しない。——丁度僕達が毎日肉類ばかり喰べてゐると、それに厭いてサラダ類を欲する様にね。」

私「さうです變態性慾者ですね。極端な官能の刺戟を欲しないと、麻痺した神經を醒ますことの出来ない」と云つた女、ナナとか、ボバリー夫人と云つたやうな女ですね。」

M「さうですモーパッサンの美貌の友なんかその代表的なものだ。」

E「あそこを××するのが佛蘭西では當り前の房事だと云ひますね。リヨンでしたかな——。未だ三十にもならぬ女が總義齒をしてゐたのがありました。聞いて見ると、それで嫁いでゐると云ふのにはほんとうに面喰ひましたよ。ハア……………」

F「私達は、知りませんね。話でよく聞いてゐますが、それに家内は、母親が土耳其人ですか」

O「どうも怪しいもんだな、だが佛蘭西の男で髻を生さない者は、あれをするんだ、と云ふ話」

だが。」

E「まさか、しかし笑繪の中の男には髻は餘りありませんねハア……………」

M「ルーブルだつたけ、女神の像を冒瀆した男の話がありました。」

A「色情狂でせう。總じて病的性慾者は、東洋より、ヨーロッパの方が多いやうですね。日本などでは、餘り聞かない話だが書物に依ると、偶像姦や肖像姦など随分白人の中には多いやうです。中世紀時代には獸姦や、屍姦など、流行と云へば可笑しいが澤山やつたらしいんです。やつぱり病的性慾の一つですが割合に輕視されてゐるのが、學者の云ふ顛倒性慾即ち同性愛ですね。日本でもよく女學生や女工間にある奴ですが、歐米人は殊に、さう云つた病的な處を餘計持つてゐますね。有名なハイソリツヒ八世の妃カザリナ、ホーワードだの、露國女帝カサリナ二世などの話など其の代表的なものです。」

私「希臘の女詩人サツフォオなども有名です。男性では此の男色事件で牢囚となつた享樂詩人オスカー、ワイルドなどもさうでせう。プエルレーヌが、美少年ラコポーを嫉妬の餘り撃つた話など一寸日本では聞かれませんか。」

M「サデスムスだのマソヒスムスだの、よく聞くことですが、實際あんな變つたのがあるでしょうか。」

O「あるでしょう。それ日本でも谷崎潤一郎の小説によく書いてゐますね、そのマソヒスムとか云ふのださうですが、柱に自分を縛らせてその頬を愛人に撲つて貰つて嬉しがるとか、戀人から馬のやうに虐使されたりして満足すると云つたやうな。」

F「ほんとうですよ、僕なんかマルセーユでそいつに出會しましてね。弱りましたよ。エ、勿論、プロでしたがね。さあもう三十を過ぎてゐましたでせう。種々な器具をもつてゐました。さうくシヤバネ街の女郎屋の入口に鎖があつたでせう。まさかあんな大げさのぢやなかつたですが、革帶とか、紐とか、薬品の類をね、最初椅子に縛らせて、革鞭で撲らせるんです。びしつとその雪のやうな肌に革鞭の當る度にム……と、齒を喰ひ轉る形相はまるで猛獸でしたね。それが痛いのがやないんださうです。しかし、白い脊や盛り上つた胸に、赤い蛇のやうな痕を見ると可愛さうと云はふか、氣の毒と云はふか、全く撲つてゐて汗が出ましたよ。未だその上紐で首を絞めさすのださうです。薬品ですか、硝酸銀か何かでせう。腕や、胸へ、好きな男に署名——で

は可笑しいが、まあ名を焼付けて貰ふのださうです。賣笑婦としては珍らしい方ですね。」

A「そんな種類の女に却つて病的なのが多いのです。だが、マソヒスムスは、相手に迷惑を掛けないが、サデスムスは相手を苦しめて悦ぶのだから、助かりませんね。フオイエルバツバの發表した中に、愛人を殺して、その血液を啜り、その肉片を食つて、性の満足を計つたとか、或る英國の裁判所の書記が美しい少女を森林中で犯し、殺害して其の死體を寸断したと云ふ事實があります。困つた色情狂ですね。」

O「大戦後一層佛蘭西、否、歐洲一般の人間がデカタンになつたと云ひますが、従つて變態性慾者も多くなつた事でせう。婦女子の貞操觀念が戰爭によつて、變つたことは、歐洲人も餘程憂えてゐるやうですが、所詮、此のま、ぢや、續かないでせう。」

M「爛熟ですね。世紀末ですね。誰かの云つたやうに、モンマルトルに處女歩ます——の名言のやうに巴里はいや佛蘭西は今に處女なき國となるぢやないでせうか。」

私「でもクリニー博物館の貞操帶は嚴めしいぢやありませんか。鐵や貝の、あの嚴重なものをよく長い間着けたものですね。あれを見ると佛蘭西女もなかく偉いすな。」

F「あれはほんの話の種ですよ。十字軍の出征兵士が妻女に嵌めさしたと云ひますが、皆それを實行したか疑はしいものです。」
E「結局あれは、佛蘭西女の淫蕩さを證明するやうなもの。」
夏「夜は短かい。もう時計は十一時を打つた。愉快な變態性慾問題を終つた。人々は夫々自分の室へ歸つて行つた。」

美 姫 の 正 體

幽霊の正體見たり枯尾花——

オペラ座の前で拾つた亞米利加の石油成金の令嬢とも思はれるやうな現代で派手な衣裝を着た十八九の美しいマドモツセルと腕を組んで、コンコラードの廣場からエトワールへとそつろ歩き。カフェエーのマロニエの樹下で、キューラソウを呑み、ワグラム街に入つて野外ダンスの群れに投じて、や、汗ばんだ彼女の肌の匂ひに陶醉し乍ら、デアナ街の怪しいホテルの三階に疲れた體を運んだは午前一時過ぎ。

夏は七月、共和記念日に巴里の街は全市舉げて熱狂のお祭氣分に酔ふた晩である。疲れて、ぐつぐつと寝込んだ私が、何物かに驚ろかされて——、恐らく悪夢だらう寝汗をびつしより掻いてゐた。——眼をさますと、その夢に見た怪奇派の畫家に依つて畫かれた悪魔の殿堂の延長とも思はれて、此の古風な室の橙色の壁や、鉛色の十八世紀型の卓子や長椅子、だらりと重くるしく垂れ下がった淺黄の窓掛が、消へ入りさうな枕下の五燭光の淡い光りの中に不思議な明暗を作つて浮び出てるのを、私は呆れたやうにちつと眺めて思はず首をちぢめた。そして寢返りを打つた瞬間。

「呀ッ」

と私は聲を發して、寢臺から、ころがり落ちた。其處には、ピカ／＼と眞鍮製の藥罐みたいな大入道の頭がその薄闇の中に動いてゐるではないか。床に落ちた私は、慄へる兩手で寢臺の脚をつかまへ乍ら起き上りかけた。とその手に觸れたは毛もくぢやらかな熊の手だ。

「わつ」

何んと情けない私であらう。這ひ乍ら衣装戸棚から服をとり外して、入口の戸を開けると脱兎

欠

Mは元氣づけに卓の上の煙草を吸ひつけた。間もなく歸つて來たS、顔中の造作をくづしてニコく顔。

「いやM君御馳走様、十法拜借したよ。」
一體どうしたんだいと聞けば

「彼奴は、M君の隣の室にゐる、女の繪かきさ。もう此の一週間、風邪かなんかで寝てるんで、文なしになつたが氣分がよくなつたから、今日は外出して久しぶりに何か、甘い物でも喰べやうと、M君を誘つた譯さ。で、十法なら、晝飯は充分だらうと云ふ處で、交渉成立さ。だが、風呂嫌ひな佛蘭西人で一週間も寢臺に寝つめてゐたんだからとても臭くつてね。ハツハ………。湯に這入つたら、今夜はモンマルトル邊のミュージックへでも連れて行かうと約束して置いたんだが。」

十法で、交渉成立!

そこでM、瞳を丸くして。

「な、な、なる程、巴里は愉快な處だな。」

欠

日本へ歸れぬ話

僕、性來繪が好きなものですから、此處へ來ると獨逸へ行く氣になれなくなつたのです。それでも最初は、せめて一二月遊び乍ら繪の研究をしようと思つてゐました。未だ獨逸の學校は始まつてゐなかつた關係もあつたんですが、でもホテルを出るとレスボン街の下宿屋へ行つたんです。先づ佛蘭西語の勉強からと下宿のお神に、語學の先生をと頼むと、丁度下宿の前に居た、ソルボンヌ大學教授の御嬢さんが、遊んでゐるから頼んで見ませうと云ひます。日本から來たばかりで此の國の様子を知らぬ僕は不思議でした。まさか堂々たる大學教授の御嬢さんが、貧乏な日本人學生に語學を教へるなんて考へられませんか。ところが、その翌日、ちやんとそのお嬢さんが私の室へやつて來たから驚きましたよ。で、私は彼女に就いて、A、B、Cから始めました。日本で少し習つてゐましたので私は手取り早く、日常語を教へて呉れと頼みました。諾々と彼女は云ひ乍ら笑ひました。其時の諾々の音が今でも、僕の耳底に残つて、あの當時の事をすつかり忘れてゐる僕は、此れだけは、はつきりと覚えてゐます。南向きの窓を背にして、斯う

つ、ましやかに座してアーサーエネケルの英佛會話集を、マニキュアした美しい爪先でくり乍ら、何回も何回も僕の發音を正して呉れる金髪の少女の顔、何んと——美しい女だな可愛い娘だなあ。と私は心に呟いたものです。笑つちやいけませんよ。で斯うして毎日、二時間なり三時間なり教はつて行つたのですが、次第に言葉もうまくなつて行き、カフェーや、公園へ一緒に散歩もし、遂に彼女の家へも出入するやうになつたのです。がとうく、彼女が二人になつたと云ふ始末です、五ヶ月位になるともう隠せませんものですね。最初は彼女自身も知らなかつたし、僕も腫物だらうとごまかしてゐましたが、とうく、其れが子供と聞いた時は彼女は氣狂のやうに泣き叫びましたよ、一體佛蘭西人は出産を死のやうに恐れるのです。だから日本の女のやうに私かに子供を作つたと云ふ道德的な恥辱を恐れるのでなく、産と云ふ苦痛を恐れるのです。僕もその時は實際途方に暮れましたよ。彼女の兩親へ一切を打明けた時、彼女の父の博士の言葉が皮肉ぢやないですか。「貴方は立派な日本の紳士ですね。その紳士の貴方が、娘から此の國の言葉を教はつた。その報酬に貴方はなんと云ふ鄭重な日本語を娘に教へて下さつた事でせう。いやどうも有難度う御座

います。」

とね。僕は直ぐ其の下宿から、ヴァンベスの郊外の家に居る友人の許に引越しました。ところが彼女は僕を慕つて家出して来る、彼女の両親は、私が日本人であること、自分の社交的地位の關係から二人の結婚を許さないと云ふ。其處で大使館のMさん等を煩はして、とうとう結婚迄漕ぎつけたが、さて此の事を日本の親に知らせると親父から、火のやうに怒つた手紙です。元來私の家は、千葉縣の士族でしてね、昔氣質の親父ですから、とても許すどころか、直ぐ金を送つてやるから歸國せよと云ふのです。よし歸るから金を送れと云つてやつて、その金で二人の家を持つたのです。勿論そんな風で結婚式は出来ないので、まあ同様と云つた形だね。

親父はいよいよ怒つて、とうとう學資の送金を止めました。で僕は仕方がないので、夜間だけ働いて、晝間學校へ行つて、とうやら學校も出て今では、とうやらやつてゐますが、日本でも困つてゐるでせう、僕は一人息子で親父が死んだら、家を繼ねばならぬ身です。だが親父の生きてゐる間は歸れないでせう。僕も歸りたくありません。

若いドクターY君はその美しい房々した黒髪の垂れるのを華奢な手で撫で上げると、少し愁

ひげに其の眼を窓の方にやつた。その時入口の扉が開いて、Y君の愛妻マーケルさんが、

「ゴハンの用意が出来ました。」

と優しい顔を出した。

「手料理ですが喰べて下さい。さあどうか。」

Y君は立ち上つた。

G 座の怪奇劇

強烈なる智覺神經の刺激を欲する現代人の慾求に應じて生れたものが、慘忍と怪奇に富んだ變態心理劇である、巴里には、二つの有名な此の種の劇場がある。

その一つのグランド、ギニール座を、Yドクトル夫妻に招待されて觀劇した。これは元來家のアトリエであつたのを、そのまゝ使用したもので階上と階下を合せても僅か二百名を收容出來兼ねる程の小さな劇場である。天井や壁畫は煤に古びて暗い感じを與へ、狭い座席に觀客が着席すれば通行出來ぬ程の舊式なものである。従つて舞臺も日本の寄席の高座位な廣さである。

青い重くるしい緞帳が、ガタ／＼と床を叩く異様な音と共に静かに巻き上る。既に観客をして、現はれる舞臺の怪異の豫感を感じしめる。薄暗い室である。汚らしい卓と、二脚の椅子、右奥にカーテンの隙から寢臺が見える。田舎の木賃宿の情景である。此處へ行き、おそくなつて泊り合はせた旅の紳士と、色情狂の宿の娘と妖艶な淫賣婦と、その情夫で熊のやうな男と、耳の遠い老婆の宿主とが現はれて、斯うした魔窟に於ける人生のどん底にうごめく者の、醜い情慾と金銭の争鬭を演ずる、結局紳士が淫賣婦の情夫の短銃で倒され、色情狂の娘が、その情夫を撃ち殺してゲラ／＼と笑ふ。老婆がその恐ろしい形相でそれを眺めると云つた、世にも薄氣味悪い零圍氣の中に幕となつた。

淫賣婦に扮したローランド、及び色情狂の娘になつたヘレン、フキスは共に若手の人氣女優で、斯うした變つた演技に特殊な藝才を持つ者ださうである。

斯うした様な一幕か二幕物の二三を終つて、呼び物の「怪獸」の幕となつた。寒い冬の夜の室である。山峽の小さい街に開業してゐる老外科醫の外科室である。外科室と云つても、少しばかりの器械を正面の硝子戸に置き、ほそ／＼燃えたストーブの前に青銅色の長椅

子と、エナメル塗の器械卓子を置いたばかり、上手の入口に古ほけたピアノが妙に此の物寂しく室の中に不調和に置かれてある。瘦せた頬に長く顎髯をつけた、眼のぎよろりとした神經質らしい老外科醫が現はれる。手に鞭を持つてゐる。其處へ、僂僂の下男に案内されて若い旅人が、血

争つたものらしい。外科醫が、僂を命ずる。患者の男はおど／＼し

すつと上手の扉が開いて、風のやたりを静かに見まはす。ピアノの

「あれ、あれ」

と狂ひ出した、繻帯を巻き終つた老外科醫は鞭を上げた。患者の男は愕然として、狂婦人の前に走り出て之れをかばつた。怒つた老外科醫は鞭を上げて、ジリ／＼と迫つて来る。すつと身を翻した婦人は、卓子の前に来て何か、紙片に走り書きしてそれを患者の男に渡して扉の外へ脱兎の如く身を隠した、老外科醫も其の跡を追つてゆく。残された患者の男は手の紙片を読み終ると、にたりと笑つて、うなづき乍ら下手の出口へ消えた。

二幕目——頑丈な鐵格子の窓の外にチラ／＼雪の散つてゐるのが見える。寒い冷いがらん

とした室である。椅子にもたれて、青ざめた顔の貴婦人が物思ひに耽つてゐる。

「ビーツ」

鋭い口笛の音、婦人は立つて窓から下を見る。やがて梯子がかけられて、覆面の男の姿が窓に現はれる。

「静かに」

婦人は微かな聲で注意して内から手斧を渡す。鐵格子が破られて、覆面の男の體が室内に入る。其時上手の扉を激しくノックする音、二人ははつとしたが、覆面の男はポケットから短銃を出して見構へる。

「ウオーツ」

又しても、怪しい獸の鳴き聲、激しく扉を打つ音。意を決して婦人が扉を開ける。怒りに燃えた老外科醫が鞭を片手にふり上げて躍り込んだ。然し覆面の男のつきつけられた短銃に脆くも兩手を上げる、その時婦人は大きな袋を老外科醫の後から冠せて、自由を失はしめてしまふ。脱兎の如く婦人は外へ出て行つた。

「呀ッ、あの女を捕へて下さい。」
縛られた老外醫は、もがき乍ら叫んだ。

「黙つて……」

と覆面の男は短銃をつきつけ乍ら看守してゐる。ウオーツウオーツ。

突然、弾ね返された弾丸のやうに、僵僕の男が飛び込んだ、すたくに服は裂れ、顔も手も生々しい血潮である。胸から腹へかけて血を浴びた婦人が、極度の恐怖に身を慄せ乍ら走り出るとバタリと倒れた。

覆面の男は矢庭に、老外科醫を袋から救ひ出す、其の時ウオーツウオーツと云ふ聲と共に、狒狒のやうな奇體な獸が現はれて老外科醫に飛びついた。老外科醫は、卓に置かれた短銃でその奇體な獸を打ち倒した處で、靜かに幕は閉ぢられた。

観客は息づまるやうな怪異の世界から、ほつと現實に甦つた。

「實に物凄い芝居ですね、然し、言葉がもつとよく解ると、一層興味が深いでせうけれど。」
私は立ち上り乍らYドクトルに云つた。

「僕だつて、すっかり白詞がわからないんですよ。あの猛獸が、外科醫とあの婦人との間に出来た兒だとしてゐるんですが、さう云ふ事實は、此の世に必らず無いとは云ひませんね。」

「さうです。しかしあのハーロンと云ふ外科醫はよく演りましたね。」

「ゴードットと云ふ、怪異劇で有名な俳優です。ハーロン夫人になつたのは、此の座のスターでマキサアと云ふのです。斯う云つた演技は普通の役者ではやれない或る種の天才が必要で

ね。」

階段を下りて行く時、右手の酒場の前の二三人の案内女を見て、Yドクトルは何事か夫人に私語くと、

「あれです。あの真中にある女を、此の間、僕の友人で日本から来たばかりの畫家が言葉も解らないのに引掛けましてね。別れるに困つて僕を散々手古摺らせましたよ。」

見ると、此の暗い怪奇劇の劇場に不調和なほど、大きな可愛い眼を持った明るい顔した女であつた。

オペラで逢つた女

伊太利、瑞西の旅から歸つて、二度目のオペラを覗いた時は、オペラの季節は過ぎて夏期興行であつた。日本と等しく一流の俳優は避暑に海や山に行つて後では新進の俳優が所謂藝道試験の爲めにやるのである。出し物は、「サロメ」「サムソン」、人気女優として賣出したラサンドラ嬢のサロメが賣物である。

華麗なサムソンの舞臺面と、奇怪なサロメダンスは、世界のオペラの殿堂と云ふハンデーキヤブの爲めと恰も微行で見物に來た英國皇族などの爲めに一層引立たせ私を満足させた。幕間に、代々の名優の大理石の胸像を飾つた廊下を過ぎ其處の酒場の椅子に腰をおろしてゐると隣りの椅子に居た二人の貴婦人が、じろく私を見乍ら話してゐる。一杯のオレンジジュースを飲み乾して立つて行かうとすると。

『もし一寸』

と日本語でその一人が呼び止めた。

『貴方フミコ、タケバヤシ知つてゐますか。』

武林文子のことだと思つたから、

『知つてゐます。だが逢つた事はありません。』

と云ふと、

『さう、妾、彼女の御友達よ。』

一寸面白くなつたので、去らずに居ると、

『御掛けなさい。』

と今一人の若い貴婦人が側の椅子を指さした。

『ジュン、ツジも知つてゐます。畫家のフルヤも、妾、モンバルナスの日本の藝術家が大變好きです。妾、日本に行かないけれど日本語習ひました。うまいでせう。』

『うまいもんですね。』

『ウサエモン來ましたね。カブキのウサエモン。しかしあの人のマダム、キモノを着てゐました。キモノは綺麗ですね。』

なか／＼日本通である。それに之れだけ日本語の出来る女は珍らしい。未だ三十にもならないだらうが、一體何者であらう。

「妾日本の芝居好きです。ハラキリお蝶さんなどよく見ました。しかしオデオン座のシユゼン物語は、よくわかりせんね、日本の俳優がやつたら面白いかも知れませんが。」

ベルが鳴つた、次の開幕時間である。私は、此の興味ある日本通の貴婦人の話を今暫らく聞きたいと思つたが、彼女等は懐中鏡を出して顔の修理にかゝつたので止むなく立ち上つた。

「さよなら」

私は急いで自分の席の方へ行つた。ホテルに歸つて、S君に此の婦人に就いて話したら、

「日本人の劇關係者と同様してゐた女だらう。然しきつとあれだらうぜ。」
と云ふ

「然し、なか／＼氣取つた風をしてゐたぜ。あの夜會服だつて安い金ぢや買へないと思ふよ。」
「オペラで稼ぐほどの奴さ。貴婦人の風をするのは當り前ぢやないか。」

S君は笑つたが、寢床に這入つて考へて見ると、賣笑婦にしてはどうも餘りに教養のある女だと

欠

好色どい女

好色どい女



エリカ物語の主人公向つて左

そんな心配はいらないことよ、
いつそ妾の家へ引こして来たら
どう、お使もたのんてあげるよ
だが、妾の云ふことだけは何時
でもきかなくちや駄目よ、
だつて、だつて……
考へさせられるのが獨逸女の親
切だ。

欠

女 伯 林

獨逸は戦に破れた。僅かオーストリア軍と一緒に、世界の列強を相手に戦ひ續けて滿五ヶ年、而かも其の八分迄勝ち通して来て最後の戦——それも、武器でなく糧食の缺乏から来た飢餓との戦ひに禍されて自ら國內の騒亂、革命の爲めに破れたのである。

だが、その戦敗の獨逸に来て一番驚かされるのは、勝利の英國や佛蘭西より遙かに國內の諸機關の整然としてゐる事と獨逸國民の活々と、其の瞳に更生の光りを輝かせ、働いてゐることである。伯林の市街の行き届いた交通整理、街路の掃除、さては地下鐵道の綺麗なことなど、殊に旅人の心を打ち、何よりも氣持よく感ぜしめる。

だが、敗れた獨逸で、戦後十年尙癒し切れないのは、賠償金の支拂と、未婚の女の始末である。伯林の街を歩くと、何處でも男より女の数の多いのに氣がつく。女の街、女の伯林と云つた感じである。金のない女は結婚が出来ない。男の少ない獨逸では、金に不自由するやうな女と、男は結婚どころか、戀人にもしない。二十五歳位で初婚の女は先づ幸福だと云はれてゐる。従つ

て、少數のブルジョア婦人に男を奪はれた多數の貧しい娘達は、地下道の下水工事人夫や、おんほう焼の男さへ相手にして呉れない。さなきだに好色の素因を持つ彼女等は、性の悩みに堪へかねて、此處に來る異國の旅人であらうが、勞働者であらうが、男でさへあつたらと寄りついて、空しい自分を性の悩みから救はうと企てる。

「獨逸では日本人が一番優遇される」

と云はれるが、戦後直前、日本から留學した者が、マークの暴落に乗じ、いゝ氣となつて出鱈目に金を蒔いた事と亞米利加人の多く來る佛蘭西や其の他の國と違つて、富裕な日本の醫學研究の徒の集まる爲めに飢ゑた獨逸女から一層厚遇された譯だ。だが、鈍重で、隱忍力に富むゲルマン民族は模倣に秀で、一致協力の國家的觀念に富んでゐる點は、わが日本人に似たところがある。或は此の意味に於て、日本人に好意を持つところも多いかも知れない。

伯林の街で一番愉快に感ずるは、可愛い盛りの小學生から『オハヨウ』『コンパンワ』と日本語で聲を掛けられることである。若い美しい少女に『如何です、御茶飲みに一緒に御出になりませんかと誘へば、悦んでついて來る事である。伯林に幾多の日本人先輩の残した戀のロマンスがあ

る。今日日本の刀圭界で、權威と稱ばるゝ人々が残して行つた數多の戀物語は、世界の何處の都會のものよりロマンチックで又其の數も多い。
女の伯林！日本人の一番もてる伯林！世界で一番ロマンチックな日獨戀愛の地の伯林！その伯林の女をめぐつて筆者はどんな興味深い事實を擷んだか。

カフェーヴ井クトリア

*O, mich, der Jugend schenke
Stunde sie wissen nicht von
Wiederkehr. Einmal aufleben
einmal entschwinden zurück
kocht keine Jugend mehr
zur Erinnerung
an
Miss Adrian*

にアリトクキザーエフカ林伯
ンイサの子題

ヴキクトリア公園脇のカフェーヴ井クトリアは、日本人の一番よく集まる處である。夕闇が次第に公園の木立から擴がり行くと、その青い街燈の下を、端歌や、民謡を高らかに唄ひ乍ら靴音高行く幾群の日本の若いドクターを見受けるであらう。それと相前後して、美しい舞踏服の女達が、いそぐと明るくヴキクトリアとしたイルミネーションの輝く家の戸口に吸ひ込まれ行く。

入口で、外套と帽子を預けて中に這入る。細長い室に一杯に置かれた椅子、中程に踊り場が設けられ、其の脇の段に十人餘りのジャズバンドがあつて、賑かに吹奏してゐる。それを通り抜けて行くと、左側に水色のカーテンで仕切つた二十疊敷位の別室、特別な裝飾もないが入口に酒を賣るカウンタが設けられ正面の窓側と右手の壁側に、長椅子や卓の六つ七つが置かれてゐる。その隅で一人の若い男が、ピアノで亞米利加ジャズ「ブルーヘブン」を弾いてゐる。それにつれて七八名の女達が、彼女等同志踊り乍ら椅子に就いてゐる日本人の客——此處では何の椅子にも日本人ばかりである——に盛に媚笑のモーションを掛けて居る。

ピアノの横で、二人の女がしきりに小さいカードを並べて、笑ひ興じてゐる。よく見ると花札である。

「エレン。花札の遊び知つてる？」

私の案内役、Kが此方から聲をかけた。顔を上げた彼女。映畫女優のピックフォードに似た腫を輝かせて、

「おや、ドクトル、久しぶりね。」

と持った花札を卓に投げて、私達の卓へやつて来た。

『どうだい。久しぶりに踊るかな。』

『一杯呑んでからね。』

そこで彼女は、頭のつるりと禿けた給仕に、ウキスキーを命じた。

『此奴は大の呑み助でね。猛烈に呑むよ、馬のやうにね。ハア……だが氣はい、奴さ。それに日本式で云つたら傳法かね俠氣があつて、なか／＼此處で勢力を持つてゐるよ。なあ、エレン。アホイッキヨを唄はないか。』

K君はエレンの肩を叩き乍ら云つた。

『アホイッキヨノハマベデハ……オホ……それより一つ踊りますかね。』

ぐつと卓のウキスキーを一呑みにして、エレンはKの手をとつた。静かなピアノの音に、一團の蝶のやうに踊りが始まつた。其處へ、丈の高い神經質らしい瘦せた顔の女が這入つて来た。踊つてゐたエレンに聲を掛ける。音楽が止むと皆は卓へ歸つて来た。

『此の人、淑女ミヤ。』

とエレンはおどけた調子で、その瘦せた女を紹介した。髪は眞黒な、何處か東洋人らしい貌をしてゐる。右隣の席に佛蘭西人らしい二人の男が座した。しかし此處に居る女達は誰も媚笑を送らうとせぬ。左の卓には日本から今朝當り着いたばかりらしい肥つた實業家と云つた老紳士とそれを取り巻く五六人の一團此處に三人、向ふに四人、女に取まかれて、賑かに話してゐる。は全く、日本人の客である。ピアノが鳴り出した『春雨』の曲である。それが終ると唱歌である。

『モシモシカメヨ、カメサンヨ』

女達が唄ひ出した。客も立ち上つて盃を片手に床をどん／＼踏み鳴らし乍ら唄ふのもある。

『どうだ愉快だらう、見給へ、隣りに居た毛唐共が出て行くぢやないか。牧場を追れた廢馬の恰好だね。いや愉快／＼。』

Kは興奮した瞳を輝かした。

『だが、此處は、幼稚園と云ふ處だよ。つまり此處へは旅行者か初心者の方の来る處さ。今夜來てゐる客だつて皆、伯林に長らく居る者はないよ。知らぬ人ばかり來てゐる。二三回此處へ來て、先づカフェー遊びの手ほどきを覚えてから尋常科、中學、大學と進むのだね。大學になると日本

人なんか一人もゐない處へ出掛けるさ。しかし、その頃になると、カフェーの女なんか馬鹿けて来るよ。女は街頭に幾等も轉つてゐるよ。夏の夕暮時に、軒下を行くと、よく顔にぶつかる奴があるね、蚊柱さ、伯林の街を行く時はあの蚊柱を分けて行く氣持だよ、女の蚊柱をねハア……」
髪は褐色だが腫の黒い鼻の低い、脚の短かい子供を生んだ、ヘリーと云ふゴム人形みたいな顔した女、同じく黄色な皮膚の赤ん坊を持ち、アンと云ふ肥つた女、視察に来たM代議士と一緒に日本へ行つて、東京の法螺を吹く、お喋りの女等、幾人も卓へ来ては戯れる。
歡樂の夜は次第に更けて、いよ／＼高まるジャズの狂騒——踊るよ踊る、モシモシ龜が兎にもつれて。——

エルザは泣く

「ハロー、貴方ドクトル、妾判つて、エルザよ、妾直ぐこれから出掛けてい。待つてゐて下さる。え、大變な事になつてしまつたよ、さうです直ぐ行きます。」
興奮した聲だ。どうやら泣いてゐるらしい。又Kと痴話喧嘩でもやつたろう。来たらうまく



ザルエ 公人主く泣はザルエ

エルザさ。

「そうですか、何時ものエルザさんの聲と大變違つてゐたやうでしたから。」
「何、又Kと喧嘩でもしたのだらう。さう／＼直ぐ来ると云つたからもう一つコーヒーとお菓子ね。」

慰めて仲なほりをさす事だ。がちやりと受話器を掛けると、室へ這入つて行つた。其處へ下宿のお神が、おやつとコーヒーと菓子を運んで来た。
「娘さんからの電話でしたね。」
「何、エルザさ、Kの愛人の

間もなく、扉を軽く叩く音。

「お這入り。」

と云ふと、

「ハロー」

何時もの快活さはすっかり失せて、泣き腫らしたらしい腫の縁を赤くした顔、しほしほとエルザは這入つて来た。

「何うしたの、喧嘩かえ。」

私は椅子を奨め乍ら云つた。

「い、え。」

と彼女はうなだれた。何時もと餘程様子が可笑しい。

「妾、Kさんと別れねばなりません。」

「別れる。何時もの調子で別れて又一緒になるのか。」

私は、軽く笑つた。

「違ひます。Kさんは他に戀人が出来たのです。妾を愛して呉れないのです。愛して呉れない人を妾は愛することは出来ません。それにKさんは来月から妾には一文も報酬を呉れないと云ふのです。妾は生活に困ります。」

「ホー。其れは初耳だ、何時そんな事になつたのだね。」

「今朝です。Kさんが研究室へ行く前です。」

實際をいつは私も驚かされた。昨夜もKと一緒にカフェーベルツで遅く迄踊つたのに、一口だつてエルザと別れるなんて云はなかつたから。エルザの話では、今朝早やくKから電話が掛つて直ぐ来いと云ふから出掛けて行くと、Kが何時にもない不快な顔をして、お前にはもう愛が失せたから、来なくてもいい。お前に對しての報酬も今月限りやれないと云つた。驚ろいて其の譯を聞く理由は何もない、要するにお前が嫌ひになつたのだからと云ふだけであつた。そこでエルザも獨逸女である。愛のない男に何時まで泣いて頼んでも無駄だと思つたから、直ぐ自分の家へ歸つて行つたが、流石は女だ。獨りになつて考へると欺かれてゐた口惜しさと、尙心の何處かに残る未練さに泣かずに居れなかつた。で、Kの親友である私に一切を打明けて、どうした理由で彼が

自分を捨てたかを聞いて欲しいと云ふのである。

『それで、あなたはKの愛を復活させやうと思ふのですか。』

と私は涙を拭いてゐる彼女の顔を覗くやうにして慰めるやうに云つた。

『いや、もう再びKさんの家へは行きません。私の胸から永久にKさんを忘れて仕舞ひます。』

『そうして。』

すると彼女は、小さな聲で、

『誰か日本人の方の御世話になりたいの。私、獨逸語の教師でもして見たいは。』

聡しさに云つて彼女は、手提の中から一枚の手紙のやうなものを出した。

『これどうでせう。』

見るとそれは『WATAKUSI NIHONJIN NO KATANI. DOITUGO OSITEMASU. WATAKUSI NIHONGO DEKIMASU. EIGOMO SUKOSI DEKIMASU』とイターで打つた變んな羅馬字文である。

『これをどうしやうと云ふのです。』

『妾、これを日本大使館と、日本料理店に廣告したいと思ひます。』
『なるほど、いゝ考だ。だがもう一度、よくK君に話して見ませう。』
私はいろく、慰め乍ら彼女に明日迄待てばKによく聞いて、悪いやうにしないからと云つた。彼女は悦んで出したお茶も飲まずに歸つて行つた。直ぐKに電話を掛けて様子を問ふと、フリードリッヒ當りへ夕飯を喰べに行こう。その話はその時にしやうと電話を切つた。

私達はやがて伯林第一の料理店ラインゴールドで夕食の卓に向ひ合つた。

『理由はないさ、もうつくづくあの女が嫌になつたからよ。もう半年にもなると全く厭きも来るよ。此の前奴と同棲してゐた時、此の問題を出したがね、可愛相だつたから、今迄面倒を見てやつてゐたんだ。月百マーク宛やつて、タイプライターを叩かせてゐたんだが、女は幾等もあるからね。昨夜君と別れて、歸りにノーランドルフで、素的な可愛い、娘に出逢つてね。何、縫娘さ。カーテンや敷物の刺繍をやる女さ。とうく、ホテルへ行つたが、素的な綺麗だよ。一寸浮氣心が出て牛を馬に乗り替へた譯さ。だが君に同情を賣りに来たんだぜ。日本語の先生は一寸芝居染みてゐるね。君を餘程甘く見てゐるぜ。同情を賣つて君の助力を得やうと云ふのさ。そうか、そ

いつは君は偉い。その時手を出したら、直ぐに君に寄りついて離れないだらう。」
 Kは古新聞を道傍に捨てるやうな氣持ちで、斯う云つて大きく笑つた。で私は其の翌日エルザへ
 何の便りもしなかつた。それからKは新しい愛人、全くエルザなどより若くて美しい小女ミケ
 ルと腕を組み乍ら、私の下宿を訪れるやうになつた。エルザは何うしたろうと、私は其の度噂し
 たが何時とはなく忘れてしまつた。

それから二ヶ月を経つたある日、私は偶然、ギヤイスベルグ街の日本料理店トキワの食堂で彼
 女が旅行者らしい日本の老紳士と一緒に、刺焼鍋をつゝいてゐたのを見た。彼女は私の姿を見た
 時、一寸顔を曇らせたが、直ぐ明るい顔になつて、

『コンバンワ。御變りなくつて。』

と端數葉に聲をかけた。其の瞳の縁を青色どつて、唇を花のやうに紅くした顔を見た時、とう
 とう彼女も、落ちて行く處へ行つたのだなと一寸可愛想な氣がした。

亭主の感謝

何しろ酔ばらつてゐたんでせう。懐中の軽い事なんか考へるもんですか。云ふまゝに車は、フ
 リードリツヒから、確かウンテルデリンデンに曲つたのは覚えてゐますが、それから先はさて、
 何處を何う駆け廻はつたか判らないんです。

何んでも、門を這入つて広い庭があつたやうでした。三階位上つた小さつぱりした寢室、さう
 です、餘りごてく裝飾はありませんでした。寢臺に身を投げてふうく息をふいてゐると、女
 がベルを押して、ソーダ水を注文して呉れました。

間もなく六十近い、猶太らしい鼻の曲つた男が、ソーダ水とコップをのせた盆を恭しく捧げて
 這入つて來ました。すると女が、

『貴方、感謝して下さい。此の方日本のドクトルよ。』

と早口に云ひます。

老給仕は、一寸顔を曇らせましたが、

「有難たう。今夜は妻がいろいろ御世話様になりまして。」
と手を差し出しました。

「妻」

驚ろいた私の言葉をおつ冠せる様に、

「これは妾の亭主よ、さあ、もういゝから歸つてお寝みなさい。」

と云ひます。老人は黙つたまゝ、超然と出て行きました。こいつ油断ならぬぞと思ふと、酔ひが一時に醒めたやうに、思はず身慄ひしました。だが女は笑つて、衣装を脱ぎ始めるのです。さうしてあの男、もう六七年此方、インポテントで廢馬同然だ。だから彼は毎晩此處に来る妻の友達にあの通り感謝するんだと云ふのです。

だが親切にして來れるほど氣味が悪くて、どうしても翌朝迄寝て行けと云ふのを、斷つて歸つて來たのですが、歸り際に之れにサインしろと云ひますから、出鱈目な住所を書きましたかね。女も名や住所を知らないのです。ですから、今に何處の邊だつたか判らないのですよ。歸りのタキシードにもちやんと彼女が同乗して、出鱈目のアドレスの◇◇◇街迄送つて來たんですから。

「え、四十にはならないでせうが、とても肌のい、俗に日本で云ふ餅肌でいい奴でしたかね。今度逢つたらと思つてゐますが、あれ以來、あのウキンターガルデンには一度も顔を見せないんです。」

K 大學を出て、今伯林大學に留學中の若い醫學士G君は語つた。

「その亭主、若返り法をやらないんですか。」

「さあ、駄目でせうな。」

「人參エキスカ、トツカビンてい處ですな。」

「ハア……生憎、獨逸人にはそいつは利かないでせうよ。何しろあの女でしたら、餘程の精力ある男でないとな。今度逢つたらあの亭主をい、研究材料にして一つ、新精力剤でも作りたいたいものですな。G君快活に啞々と笑つた。

カフエーアウリカ

夜の十一時。

ベットに横になつて、日本から送つて来た改造を讀んでみると、廊下でしきりに電話のベルの音、次いで扉を叩いて、

「ドクトル。ドクトルKから電話ですよ。」

と主婦の聲、起き上つて電話の聴診器を耳にあてると、大分酔はらつたKの聲、

「オイ、直ぐ来て呉れ金を持つてな、文句は来てからだ。直ぐ来て呉れ。」

そこで私は急いで、寢衣を着代へて出て行つた。外は寒い。通りがかりのタクシーを呼ぶ。

「カフェーアウリカ。」

カフェーアウリカは、ヴキクトリアと同じく日本人客を得意としてゐるが、後者ほど大きくもなく、飲み物等もずつと安く、それに三時頃迄開いてゐるので、通な客の行く處とされてゐる。

Berlin den 6 September 1928.

Lotti Schulze

Berlin S.W. 68

Simonstr. 13. E

ソイサの子り踊カリウアーエフカ

黄色の重たいカーテンを押して這入ると、頭の長い老番人が、

「お寒いことで。」

と愛想を云ひ乍ら、外套をとつて呉れる。酒場の前を通り過ぎてダンス場に這入ると、賑やかなジャズにつれて踊つてゐる。左の隅の大きな椰子の鉢の横に置かれた卓に、Kが桃色のドレスを着けた女と話してゐる。

「いや、よく来て呉れたね。さあ、給仕、葡萄酒。」

Kは舌もつれの聲で云つた。其處へダンスを終つた三人の若い日本人と、女達がどやどやと歸つて来た。

「紹介しやう、之の人が歌舞伎のD君、彼方がC君、此の方は劇研究家のS氏。」

夫々、握手して挨拶をする。Dは意外に肥つてゐる。舞臺顔は知つてゐたが二人とも素顔で逢つたのは初めてだ。二人共露西亞の莫斯科で、先達日本歌舞伎劇を演つて好評を博したS一座の花形俳優である。

「實は今夜芝居の歸りに何處かで飲もうと連れて来たのさ。どうだ一ツ、大に日本氣分を味は

ふではないか。』

Kは更に三鞭を注文した。

『どうも、日本で聞いてるたより、ずつと愉快な處です。Dは佛蘭西に残ることになつてゐますが、此れぢや私だつて歸るが嫌になりますよ。』

兄貴のCは、若いDがその時、隣りの女と顔をすりつけてゐる嬌態にちらりと瞳をやり乍ら云つた。

『日本の料理屋や待合の氣分と違つて、解放的であるだけ明るい氣分がするでせう。』

S君が云ふ。

『待合や青樓遊びは、何處迄も隠れ遊びだから、私達の舞臺のやうに、しんみりと何處か骨董めいてゐますが、此處では何處迄も、利那の歡樂に陶醉する華かな感じですよ。それに此の女達の瞳の色や、肌の匂ひが餘程私達を刺戟するやうですよ。』

『日本の藝者なんて、もう明治時代に既に消滅して、者だ。あんな前世記の遺物を、尙廢娼だの、自由廢業だのと騒いで問題にする日本ぢやない筈だ。ね、そうだろう。一時間幾程と云

ふ、ペラ棒な線香代を拂つて、其の癖泥でこねた人形みたいに、お座敷で座つた切りさ。席料を拂つて女中にチップをやつて、更に泊るとなると、とても僕達のやうな素寒貧の藝者では、一ヶ月の月給も一晩で飛んでしまふ。其處へ行くとどうです諸君、此處は一切が安價で自由ぢやないか。酒代だけ拂へば斯んな綺麗な青い瞳が一晩中でも、線香代なしで踊つて呉れる。氣に行つたら、奴等の家へ行くさ。廣いさつぱりした室のスプリングのい、寢臺で、朝は十二時位迄寢ておまけに、熱いコーヒを添へた朝御飯迄喰べさせて呉れて、此れだけの親切を盡して呉れてせいぜい二十か三十馬克、日本の金に換算したつて、十圓か十五圓だ。金なんかより先づ氣分が違ふよ。』

Kは、酒のせいかな今夜は、とても雄辯だ。

『だがD君にしてもC君にしても、藝者がなくなつたら困るだろう。役者に藝者は付き者だから。』

『どうしまして、藝者が役者のファンだつた時代は恐らく大正の初期位だつたでせう。今ぢや維納に來て四年、劇の研究に没頭してゐるS君は、眞面目な顔に似合す面白いことを云ふ。』

「藝者も役者などを相手にするやうな馬鹿もないでせうが、あんな教養の少ない女達のファンを得たくありませんね。」

「歌舞伎役者も變つたものだね。いや其の意氣で大に日本へ歸つたら、新時代の教養あるファンを作ることだね。」

ジャズが始まつた。Kはジャズバンドに三鞭をふるまつた。曲が梅にも春となる。

「一寸、今妾ね、Dさんと踊つてゐたらね。あの女嫌にヤキモチね。そら怒つてこつちを向いたでせう。Dさんに何か云つてゐるは。妾態とヤキモチが見たかつたから、踊り乍らあの女が見てゐる前でキツスをしてやつたの。」

隣のメベルが私の耳元で私語いた。

「日本の俳優だと云ふのであその卓にゐる人達、皆踊りたがつてゐるらしいは。」
私は大きく笑ふとDに云つた。

「あの女知つてゐる、妙に最前から嫉いてゐる話だが。」

Dは一寸向ふの卓を見て、瞳を小さくすると、

「怒つてゐますね。實は最前あいつと踊りましたが、とても猛烈な腋臭でしてね。とうとう我慢出来なくて途中で止したので。顔はなかく綺麗ですがね。」

「彼女は獨逸人ぢやないらしいね。」

「英語もうまくありませんよ。」

「伊太公かも知れないね髪が黒いや。」

すると、D君と私の間にゐた女が變なアクセントで、

「ドウカ、シヨンナコト、イワナイデ、チヨダイ。」

と云つた。

「うまい／＼。此奴は素晴らしいぞ。」

C君、愉快さうに手をはたいた。

三時だ。

踊り疲れた私達は、どやくと、戸口に出ると其處に並んだタキシシーに思ひ／＼乗つた。甲高い女の、

「オフエダゼン。」
 が夜更けの街に一時賑かに響いた。

日本料理店の女客

伯林には五軒の日本料理店がある。

東洋館、トキワ、花月、藤巻、それに日本人會、それ等が日本大使館のあるノーレンドルフプラツケ附近に散在してゐる。

トキワと東洋館は、共にキヤイスベルク街にあつて、前者は隣りに、バンション、イデルナの日本人を主として客にしてゐる。給仕はフロツク姿の男である。トキワは日の丸の大きな看板や、日傘を前裁に立てた東洋色を現はした家。近くにヅキトリアカフェーのある關係からよくそれらしい女を連れた漫遊客が來てゐる。花月、藤巻共に前二者より構へも大きく、よく諸種の宴會が開かれる。勿論お客は大部分日本人だが、連れて來る獨逸の女達は、英語の達者な日本語も多少は出來る唇の紅い女である。彼女達は勳燒を喰ふ。無論巧みに箸を使ふ。吸物もサラダに

似た酢の物も喰べる。更に驚くことには刺身を喰べる。肉食の毛唐は元來魚は餘り喰べない。それも煮るか揚げるかしないと生では絶対に喰はない。それが喜んで赤い身の刺身を、むしやくくと御飯と一共に喰べるのだからいさゝかあきれさせられる。味噌汁や大根漬を喰べる。テレーズと云ふ肥つた私娼、「日本へ行つても喰べ物に困るやうなことはないね」とからかつたら、そんな便利な女だから日本へ連れて行つて呉れたらどうと、眞面目な顔をして云つた。

トキワの女給に、ヨシトと云ふ日本人みたいな名の年増がゐる。髪の純ブロンドな、腫のくるくとした可愛い顔をした女で、

『ナニ喰べマス。』

と日本語で愛相よく客を持ってなしてゐた。私は伯林に來た當座、よく日本食を喰べに行つたが、一ヶ月ばかりで、此の女の姿を見なくなつた。

『あの人ですか、Hと云ふ日本のドクターと一緒になつて大學附近に家を持つたそですよ。』
 代りに來た瘦せて、カレイの乾物みたいな感じの悪い女が云つた。こんな處の女はたいいてい、金に綺麗な日本人のドクターに、引張り行かれて二三个月も續いて一ツ處で落付くやうなことはな

いと云ふ話、偉いものだと、いささか感心させられた。

エリカ物語



公人主語物カリエ

ある一事を認められてるだが、其後日本詩人などの所謂大家達の詩に厭き足らず、盛に歐米の詩

Yは詩人である。詩人で書けば、音楽にも相當の智識を持つてゐる。地主の倅で、K大學

の理財料を出てゐるが、天性藝

術家肌の彼は、詩を作つたり、

書を書いたりギターを弾いたり

して別に之れと云ふ仕事もしな

い。彼は日本の何んな詩人も尊

敬してゐない、中學時代に北原

白秋の選する、文章世界等に彼

は自作を発表して、「い、素質で

人の論などをするやうになつた。彼の詩集『木の葉の舞踏』は、彼の學生時代の作品であるが、
貴品のあるバリロンの影響を受けて、天鷲絨のやうな柔かい感觸を與へるものと一部の人達から
賞讃されてゐる。

何物にも捉らへられないフリーな詩人として、彼は其の詩の研究、畫や音楽の修業に歐洲へ來
た者である。そうしてゲーテやシルレルの大詩聖、樂聖ベートーベンを生んだ獨逸に先づ常分落
付くことにした。

私は彼の爲めに四五日間、市中見物の案内をした。彼は、カイゼルの王宮殿の會議室で、英傑
カイゼルが、閣僚と毎日御前會議を開いた、大戰當時の有様を思ひ浮べ腫を濕ませた。鐵血宰相
ビスマークの銅像の立つ國會議事堂の前で革命の際、石垣に撃つた銃彈の痕を見出して、それを
叮嚀にステツキの先で、つゝいて見たり、寫真に撮つたり、博物館に一日を費して、克明に世界
の藝術品を鑑賞した。或はハフトマンの寂しき人々で名高い、ホットダムの湖畔で襲ひ來る蜂を
面白がつたり、チャカルデンの木蔭に憩つて、マンドリンを弾いてゐた少年達に、無性に詩的な
感情を高潮させたり。ウンテルデリンデン街の菩提樹下のそゝろ歩きに、つい感傷的になつて高

からかに口笛を吹きならしたりETC・ETC。

更に彼は、ライン河畔にハイデルベルヒに、心ゆく迄、さうした感興をほしいまゝにしたいことを要求した。

其處で私は、一通りの案内を終ると、彼の爲めに下宿を探さなければならなかつた。メンケベルグ街に丁度いゝ素人下宿を探し當てた。其處の女將は、長らく亞米利加にゐたことがあつたので英語がよく話せた。Yは英語はよく話したが獨逸語は、單語を並べる位な程度である。左程大きくはなかつたが、南向きの窓——その窓から廣い街路を越へて向ふには大きなアパートメントの窓が見られた——のある小さつぱりとした落付いた室である。ホテル、イデルナから彼は、トランクやスーツケースと共に此處に引越して來た。彼は英語の出來る下宿のお神の居ることを何より喜んで、詩人肌の潔癖の彼にしては狭い室ではあるが、別に氣にも止めず下宿することになつた。

四日目の夕方である。私はポストダム街の本屋に注文の書籍を取りに行つた歸りがけ、さぞ獨りで寂しがつてゐるだらうと思つて、彼の下宿を訪ねやうと、バスを下りてあはただしく人々の行く暮れ方の廣場の地下鐵道の停留所前を通り過ぎやうとする時、其處の木の下にステッキをふり／＼人待ち顔、Yに出逢つた。

「やあ、どうしたんだい。僕、今君の處へ行かうと思つてゐた處さ。」
するとYは少々周章へ乍ら、

「ウム、僕ね、戀人を作つてね。」

「へーエ、偉いな。そんな早く出來たのかエ、だが勿論、變な女ぢやあるまいね。」

「大丈夫娘だよ。未だ十八九、さうだな二十位にもなるかな。」

「一體どうした機會からだ。君の下宿の親類の娘かなんか？」

「いや違ふ。僕の家の前のアパートに居る娘さ。」

二人は其處のベンチに腰かけた。Yは、かいつまんでその娘とのロマンスを語り出した。それに依ると、あの下宿へ引越した翌朝、窓から顔を出して往來を見てゐると、其の眞向ひの窓から、一人の娘が顔を出したので、見るとはなくそれに注意すると、向ふも東洋人種のYに興味を持つたものか、凝と見つめた。其處でYはこいつ面白いぞと、卓の上に在つた日本製のゴム人形を

窓から出して踊らせたり、書いた油畫を見せたりすると娘は笑ひ乍ら、何時迄も窓から離れやうとせない。寫眞器を向けると、一寸恥かしさうに首を曲けたが、直ぐ氣取つて見せた。だが相手がどんな氣持ちであるのか、伯林へ来たばかりのYとしては了解されない事である。で二日三日と斯うした他愛もない遊戯——實際としては、興味深い戀愛遊戯と感じたであらう——を續けて今日になつた。

「君讀んだか知らないが四五年前中央公論に書いた宇野浩二の小説夢見る部屋だつたと思ふ。本郷か何處かの下宿屋の窓から向ひ側の家の娘にいろ／＼な方法で無言の戀愛を戯れると云つた小説家がある。あの時の心持がはつきりと其の時想像されたよ。然し相手が獨逸娘だろう。で、無暗な眞似をしたら大變と思つて自重してゐたさ。しかし昨日の夕方窓を閉める時あの娘が、非常にそゝくさとした態度であつたが、キッスを投げたので、昨夜は一晚中考へた結果、カンパスの上へ Ich live sie を書いて、そいつを今日窓から見せたのさ。するとどうも毛唐はうまいねあんな時の表情は格別だよ。両手を胸にやつてさも嬉しさに笑つて、何か云つたらしく口を動かしたよ。ダンケー、イヒレーベジーとでも云つただらう。斯うなると僕も大膽になつたね。直

ぐDankyと書くと、向ふで、NOÛLENDORF PLATZと空中へ指で書いた。小首を傾けると、片手と奥に三本の指を出した。そこで今少し早いけれど、斯うして此處へ来て待つてゐるんだ。』

と、Yは愉快さうに笑つた。

「そいつは素晴らしいロマンスだ。だが君、話せるかい。」

「さあ、實はそいつに困つてゐるんだ。でね僕、こいつでやるつもりだが。」

Yはポケットから、アーサー、エネンケルの英獨會話集を出した。

「は、あ、考へたね。しかし相手の女をよく確めない、變んな奴だつたら、君用心せんといけないよ。」

その時Yは、

「呀ッ、やつて来た。」

と立ち上ると、地下鐵道停留所の入口へ馳けて行つた。やがて彼等は、私の前にやつて来た。十八九の可愛いらしい丸顔の小女である。

「マイネフルーエンド、ドクトルシマ。」
 變なアクセントでYは彼女に私を紹介した。

私達三人は、チャガルデンの方へ歩き始めた。

「ドクトルは、獨逸語出来ますか。」

彼女は、快活に云つた。

「少々ね。だがY君は来て間がないから、うまく話しません。貴嬢が教師となつて教へて頂くのですね。」

「エ、妾、教へてあげますわ、だが貴方何んと云ふ名。」

Y君はあはて、

「僕A、Y。」

私は可笑しさをかみつぶした。戀し合つた二人が、今初めて名乗り合ふと云ふのも變だし、それに彼等はろく／＼話が出来ないのである。

「Y君は日本で有名な詩人です、貴方の名は。」

「エリカ、ランバード、可笑しな名でせう。妾十七よ。私の両親はノースキッチにゐます。」

エ、今伯母さんの家へ遊びに来てるます。」

私は叮嚀にY君にそれを通譯した。私達は何時の間にか、チャガルデンの杜の中を歩いてゐた。

月がほのかに、池の向ふに登つて来た。その月影を踏んで、向ふの小道を一臺の馬車がゆく。其上でい、聲をして若者が唄つてゐる。

「い、な、詩のなかの風景だ。」

Yは立ち止まつて凝つとそれを見つめてゐる。戀も何も忘れたかの様に、

「あれは田舎の青年です、市場へ野菜を運んでの歸りでせう。」

エリカは説明した。私達はやがて公園を抜けて、其處の小さいカフェーに這入つて行つた。エリカは、快活にいろいろ自分の身の上を話した。彼女の母親は土耳其人で父親は、獨逸人である事や、四人の兄弟のあることや、此の春、佛蘭西語の學校を出たことなどを詳々と話した。其れを一ツ／＼、Y君に通譯し乍ら傳へて話したが、私は急に此の二人の心の中に、相互にたとへ言葉が通じなくても、私と云ふ存在物の存在が邪魔であろうと氣づいて、急に立ち上つた。

「僕は忘れごとをしてゐた。F博士を九時に訪問する約束だった。」
Y君の止めるのをふり切つて外へ出て行つた。

其の翌朝である。

未だ七時と云ふ早朝に、寝てゐる僕の下宿へ、Yはニコくしてやつて来た。

「昨夜はどうも有難たう。僕達は急に家を持つ事にしてね。」

又しても突飛な話に私は、寢臺を飛び起きた。

「實に手早いだろう。昨夜あれから彼女を連れて、下宿へ歸つたがね。毛唐の女は實に簡單だね。だが初めは人種が違ふからと思つて恐れてゐるのだとのみ信じてゐたがね。結果となつて見ると、全く彼女は處女だったから驚ろいたよ。ソファの上に打伏して何時迄も顔を上げず、すゝり泣いてゐる彼女の微かな髪の毛の揺れるのを凝と見つめてゐた時、僕は何んとも云へぬセンチメンタルな気分になつて涙が次第に落ちて来たよ。モツパツサンの中の女の一生のジャンヌが結婚の夜に感じた、あの裏切られた悲哀いや、もつとくそれよりも深刻なものを今彼女は感じてゐるだろう。人種の違つた僕であるからね。」

欠

欠

腋臭に咽ぶ

ボストタム。フラツチ迄の地下鐵道の中、折柄夕方のことだったのでぎつしりの乗客、立つてる私の隣りに二十四五の學生風の男と、二十餘りの事務員らしい女、顔と顔を向ひ合せてしきりと嬉しさうな話をしてゐる。突然、女は右手を自分の腋の下に入れると其の手を男の鼻の先へ持つて行つた。それが丁度、私の肩の上だからたまらない。嗅いッ——猛烈な腋臭の悪臭、私は思はず顔をそむけて、ごはんと咳をした。

するとどうだらう。

『良い匂。』

と男はその手に接吻をした。

邊りは一面に毒ガスの飛散——だが、誰もそれを氣にもかけない。流石は好色國だけあつて偉いものだ。

だが場合に依つてはこの猛烈な悪臭も、高價な香水より悦ばれると聞く。

いやもう。日本で春先の麥畑の風の方が、未だどれだけいゝかも知れない。咳の出来ないだけども。

文身の誘惑

「俺と今踊つた女、右腕にとても精巧な文身をしてるよ。」

「何んな。」

「蛇だよ。」

「あの女凄艶な顔に、文身の蛇とはいゝな。東洋趣味のある女と見える。」

「ところが未だ日本人は知らないと言つてゐるよ。」

「どうだ。一ツ今夜、友達になつて寫真でも撮つて明日F博士に贈物したら？、先生きつと悦ぶぜ。」

「ふぜ。」

Kはその晩、大分酔ぱらつてゐたが、とう／＼その文身の女の腕に抱かれて、私より一足先きへ、カフェーベルツから姿を消した。

翌朝早く約束の如く、私は◇◇◇のホテルにF博士を訪ふた。博士は私にもKにも學窓の恩師である。有名な文身研究者で二十數年間、日本はもとより世界的に文身を求め、三千に餘る文身者を見、千餘の寫真を集めて居られる。今回の來歐も、やはり文身の研究視察を目的にした旅である。

「そいつは獨逸最後の日のいゝ紀念だ。だが出来るなら、その本人を連れて來て呉れるといゝね。」

博士は、松魚節屋の前に行く猫のやうに、ニコ／＼し乍ら朝のパンを喰べた。其處へ寢不足な腫れほつたい腫をしたKが、元氣なく這入つて來た。

「どうした。素的な文身を見つけて呉れたつてね。蛇だと云ふぢやないか。」

博士は、彼の朝の挨拶も聞こうとせず、いきなり彼に尋ねた。

「そいつが全くその、本物でないんで。」

Kは耳の後を掻きながら氣まり悪るさうに顔をしかめた。

「本物でないつて。」

「エ、書いてるやがつたんです。何しろ酔っぱらつてましたので、昨夜は本物とばかり思つてゐましたがね。さうです、右腕の肩から肘の邊りまで、くねくねと、青い縞蛇がからみついて鎌首を持ち上げて赤い舌を出してゐる、とても奇麗で凄いいものでした。珍らしいな、奇麗だな、日本人では、文身をとて好いてゐると酔つたまぎれに、賞めたものですから、彼奴すつかりいゝ氣になつて、葡萄牙人の文身師を入れて呉れたなんて自慢してゐましたがね。今朝醒めて寝てゐる彼奴の腕を見たら、青と赤の畫の具で目茶々々になつた蛇ぢやありませんか。全く大笑ひ物でしたよ。ハ……。」

「何んだ書いたのか。だが、變つた女ではあるね。」

「毎晩書いて貰ふのかいと云ひましたら、日本人を待つ晩だけねと云つて笑ひましたよ。伯林の女もなかく掛引きがうまくなりましたね。」

私達は聲を揃へて笑つた。

獨逸製蔭人形

眞白い手だ。

窓が靜かに開けられて、その一つの眞白い手が外に表はれた。細長い、だが水々しい肉の盛りあがつた優しい指先から、赤いものが離れて下の歩道に落ちて行つた。破れたゴム風船のやうなものだ。糸屑だ。糸屑に違ひない。白い手はそつと引込んでゆく。

その時。

パーン。

恐ろしく大きな爆音である。下の車道に一臺の自動車が急に止まつた。タイヤのバンクしたのである。

と引込んだ手が再び現はれて、窓がすつかり開けられた。白い顔、桃色のドレス——。若い女の半身が現はれた。

眞黒い髪だ。切つた前髪が綺麗に兩耳のあたりに垂れてゐる。細長い顔だ。家兔のやうな赤い

眼と小さい口、だが少しの化粧もせぬ生地のままの美しい顔だ。十八九——二十歳には未だならぬかな、だが豊に乳房の盛り上つた胸のあたりはもう二十歳を過ぎた女だ。

こいつ素晴らしい発見だぞ。

同じ三階で而かも真向ひの窓とは。

だが、この通りは裏通りの癖に、馬鹿に廣ろ過ぎるな。歩道の菩提樹よ、もう延びちやいけな

いッ。茂つて窓を隠すやうな悪戯をしちやいかなぞ。

閉められたカーテンの隙間から覗いてゐる吉田君は獨りではしやぎ始めた。

下の車道では、瘦せた四十男が運轉臺を下りて、バンクしたタイヤをうらめしげに眺め乍ら、車内の者に何か云つてゐる。赤い圓錐状の廣告塔の下にゐた二人の子供が、面白さうに近づいて見てゐる。二人三人、五人、兩側の歩道から珍らしさうに男女が集まつて來た。

娘は熱心にそれを見下ろしてゐる。

——よし此方も窓を開るぞ。

吉田君は、慇とがちや、と音さして窓を開けた。圖星！驚ろきの家兎の瞳が、こつちの窓を

注意した。そしてにこりと笑つた。

失敗つた。俺はコートをつけてゐないぞ。いや、ネクタイもないッ。吉田君は胸に手をやつてはづしたネクタイに大きな恨みを感じた。だが待てよ周章てはいけない。戀は曲者だからな。

下では、とうとう諦めたと見えて、車内の男女も降りて來て、三人は自動車をそのままに向ふの角へ押して行く。集まつた人達も、馬鹿々々しさうな顔をして散つて行つた。

娘の顔を上げた。そしてその美しい顔はすぐ窓から引込んで行つた。ことにはその美しい顔はすぐ窓から引込んで行つた。

ほんとうに素晴らしい発見だぞ。

吉田君は尙も開けられた窓をじつと凝視めてゐた。

チャーツチャーツ。

おや失敗つた。俺は風呂の水栓を開けて置いた筈だつた。おや、大變だ。水槽が溢れてゐやがる。水栓を止めて吉田君は、風呂着に着代ふべく室に引返した。

おやッ又出て來たぞ。

今度は娘が窓に斜に座してゐる。下ろした手が彼女の膝のあたりに盛んに動く。物を縫つてゐると見える。アツ、顔を上げた、優しい家鬼の眼が獵奇に輝いてゐる。

被ひかけた風呂着を、ベッドの上に投げると吉田君は机の上の葉巻を一本抜いて、それから御叮嚀に長椅子を窓側に押しつけると、どかりとそれに腰をおろした。

小女は、せつせと縫ふ振りをし乍ら、絶えずこつちの窓に注意してゐる。折々下の街道を見下すやうな風をしてそつと、こつちを盗見してゐる。吉田君も葉巻の輪を吹き乍ら、やはり下の

街道を見てゐる風を装つて、小女の舉動に注意してゐる。二人の視線がばたりと逢ふ、その度吉田君は周章で、眼を下にそらす。結局吉田君はそれだけ小女より憶病であるのだ。

だが一體、あの小女は何んの目的で、そんな真似をするのだ。俺に興味を以つてゐるのかな。戀愛などと云ふ深い意識はなくとも、好意を持つ程度くらゐかも知れない。いや待てよ、そいつは飛んでもない自惚れだぞ。

だいいち、俺は日本人だよ。黄色人種だよ。

俺のこの黄色な、鼻の底い異人種の顔が彼女の興味を中心になつてゐるかも知れない。鼻を離

れた小鳥が、自分の毛色と異つた他の小鳥を見た時にする驚ろきと興味を、彼女が感じてゐる爲ではあるまいかしら。しかし何にしろ彼女が、この毛色の變つた異人種を嫌つてゐないと云ふ證據には、態々窓際に出て来て、こつちの窓を注意する心ではないか。

吉田君は、そこで、急いでスーツケースの底から、態々日本から持つて来た、人形を取り出した。眞黒い髪を島田にした大きい黒い眼、友禪の振袖をつけたその可愛い、人形を両手に持つて、窓に向けて二三度上下に振つた。小女はそれを見ると、両手を胸にやつて、心持ち首を左に傾けると如何にも感歎した表情をした。恐らく「まあ可愛い」と私語いたであらう。吉田君は今度は人形の手や足を動かして、踊りの手振りをして見せた。小女は面白さうに微笑し乍ら見てゐる。興に乗つた吉田君は、益々激しく手足を振りつゝけた。ほきん——。微かな音がして、可愛相に人形の右手はとう／＼關節から折れて、だらりと垂れてしまつた。ホイ失敗つた。吉田君は垂れた手を軽く上に舉げやうとした。そのはずみに、その可愛い手は人形の腕から離れて吉田君の指先に残つた。

小女の顔は急に悲しい表情に變つた。そうしてその時、誰か呼んだと見えて、一寸うしろをふ

りむいたが、その悲しい表情のまゝ、すつと立つて奥へ姿を消した。

うらめしげに、除れた人形の手をつまんで、それを見つめてゐた吉田君は、その時フト吾に返つた。

俺は風呂に這入るのだつたけ。

そこで吉田君は、風呂着を抱へると風呂室に急いだ。そして水槽に手をつける、思はず腹の底から笑つた。

なんだすつかり水になつてしまつた。

さて吉田君は、翌日も一日中、市内見物もそつちのけで、終日窓から向ひの窓の女と無邪氣な戀愛遊戯をやつた。彼女はその會社か何かのタイピストらしい。實際に置かれたタイプライターの前に座して、終日手を動かして乍ら開けた窓から、時々微笑を吉田君の窓に送つた。

占たツ。

吉田君は暮方、彼女が窓をしめると同時に、磨いた鞭を鳴らして、急がしくホテルの玄関を出ると向ひの建物の前のリンデンの木の下に立つて、彼女の出るのを待つた。十分、二十分、三十

分、とう／＼彼は一時間待つたが、彼女の姿が見へない。

オバーストルツの金口の連喫で、舌の先きを痛くした吉田君、しほ／＼とホテルの方へ歸るべくその露路を曲らうとしたとたん、未練にふりむいた吉田君の網膜に映つたのは黒い外套姿の令嬢らしく氣取つた、擬れもない彼女。有難ていと現代深草少將の吉田君踵を返して、そろ／＼後をつけて行つた。

すると彼女、それと知つてか、後をふりむき／＼にこつとする。が流石に吉田君も聲をかける事だけは躊躇した。彼は教養ある日本紳士、而かも伯林に来てたつた二日目、おまけに獨逸語の會話と來ては、やつと日本を立つ前に日獨案内位で勉強した位なのだから一つは心細かつたかも知れない。

やがて彼等は、ムツツ街の大通りに出て行つた。と、其處の飾り窓に支那の風景を寫し出した華かな花電氣の輝く百貨店の横を折れて入口から黄ろくほやけた光線を歩道に投げてゐる小さなカプエーのカーテンの中へ彼女は姿を消した。よし行けつと吉田君、自己を勵まして次いで飛び込んだ。入口で牡牛のやうに肥つた婆に帽子と外套を預けて這入ると、内は案外広いカプエーで

ある。

地の底から湧き出るやうな、ジャズバンドの狂騒曲、きやツ〜と男女が入り亂れて踊つてゐる。

で思つたより、たやすく、彼は彼女と同じ卓で肩を寄せ合ふことが出来た。が困つたことには吉田君、驕の尾切つての獨逸語の會話である爲め、ちんぷんかんぷん更に彼女に通じない。不幸にして彼女も英語は、THANK YOUとGOOD BYより云へないのである。

でも、とも角、二人は踊つて酔つぱらつて、やがて夜更の風に吹かれ乍ら、腕を組んで彼女のアパートに歸り、さうして――。

翌朝、百日目の深草少將の愉快で、にこ〜してホテルに歸つた吉田君、今日一日又昨夜の夢を、向ひの窓にタイプライターを叩く彼女へ、微笑と手眞似で語らひ乍ら、何んと素晴らしくも戀人のみ持つ甘酔ばい快感で胸を一杯ふくらませ乍ら、さて待たれた夜が来た。昨日のやうに彼は、彼女の建物の前の木の下で、口笛を吹き乍ら待つほどに出て来た彼女、ハロウと気軽に挨拶した吉田君に對して、はて不思議彼女は、いとも恥しげに顔を赤らめてうつむいて仕舞つた。

馬鹿にするない。昨夜あの様に馴々しくしてゐた癖にと、吉田君少しむつとして、その腕を矢庭に組んで大股に歩き出した。だが彼女は昨夜とは別人のやうに處女々々した態度。勿論吉田君もその理由を聞きたいのだがさて、例の變てこな獨逸語は更に要領を得ない。昨夜の如く百貨店横のカフェーの前へ来た。さて吉田君の

「ピッテツツーメン」

迄は通じたいが女は首を振つて、その腕を抜くと標へ乍ら逃けて行く。

「何故。」

と後から追かけた吉田君、その時向ふの歩道から、

「ハロー。ヘル吉田。」

と聲をかけられてふりむくと、何んとこれはしたり、赤い帽子に見覺へのある正しく昨夜の彼女である。

二人の彼女、

一體どつちが本物か？。

憑れたやうな吉田君、眼を白黒さして暫く啞然と歩道の真中に電柱のやうに立ちすくんだ。
今更説明する迄もあるまい。晝間窓で彼の見るタイピストと夜の街女とは双兒にもして愆しい
ほどよく似た二人だつたのである。

この話をして呉れた吉田君は、日本のN製銅會社の技師をしてゐる若い工學士、彼はもう三年
も伯林に居る立派な獨逸通であるが、この作り話のやうな事實談は彼が恐らく未だ續く伯林生活
中一番印象深いロマンスであらうと彼自身も笑つたものである。

茶 飲 み 友 達

日本でも茶飲み友達と云ふのがあつた。だがそれは高齡に達した老人でほんの一部の間にあるも
のだと聞いてゐる。

獨逸のハウスフロアエンドと云ふと、それと餘程異つてゐる。第一老人間の一小部分に限られ
てゐない。そうして鏝になつた者に限られてゐない。立派な亭主のある而かも三十位の若い人妻
が、そのハウスフロアエンド、言葉を代へて云へば若い燕を持つてゐる。

朝、亭主を勤めに出したその妻は、女中や召使に暇をやつて外へ出してしまふ——そんな女中
はよく赤い大黒頭巾みたいな帽子を冠つて、公園なんかのベンチで兵隊と、キャツ／＼と戯れて
ゐるのを見る——それから念入りの御化粧をして、若い燕に電話を掛ける。

間もなく最新流行の服に身を堅めた、寸分隙のないと云ふ、のつべりしたコミック劇場の役者
然たるモダン何とかの男が、口笛のジャズに藤のステッキを振り／＼遣入つて来る。其處で、先
づ〇きついてキッスをして、さて番昔器を掛けると踊り出す。疲れて腹が減ると、おいしい午食
を夫婦のやうに仲よく喰べる。又踊つたりふざけたりして時を過し、おやつのコヒーを吞ませ
て、熱いキッスを最後に男を送り出す。

日が暮れかゝる。

召使や女中が歸つて来る。俄に急がしい夕食の用意、御化粧、其處へ亭主が歸つて来る。いそ
／＼と之を迎へて仲よく夕食の卓につく。そうして、

『今度のビイレ座はカサノヴァよ、素的ね、それとも活動にするの。』
と甘たれる。結局連れ立つてフリードリッヒ邊の散歩となり、喜劇か活動のボックスに、むつま

じい顔を並べる。

これが先づ中流階級以上の獨逸女の一日である。そんな婦人になぜ、そんな友達なんか必要だかと聞いたら。

「主人だつて外へ出て何をしてゐるか判らないぢやないか。」と笑つて答へるだらう。

初めて下宿に来た日、お神と娘と三人でお茶を飲んだ卓で、

「ドクトルは妻があるか。」

と問ふから、

「ある。日本にもう二年も待つてゐる。」

と答へると、二人でわつと笑つた。

「なぜ。」

と咎めるやうに問ふと、

「戯談にも程がある。二年も三年も外國へ行つてゐる亭主を、ほやつと待つてゐるなんてそんな

女は世界の何處だつてある筈がない。其れはお前の自惚だ。」

と、そいつには開いた口が塞がらず、日本の女性の貞操論など説明する元氣も出なかつた。

洗滌と云ふ便利な言葉がある。

洗つてしまつたら綺麗なものだと云ふのだ。だが洗つたから處女だと迄は云はない。洗へば清

淨にもどると云ふ貞操観念である。女の爲めには調法だが、これだけは滿州から此方へは入れた

くない思想である。

臭 い 一 馬 克

ハウスファーターランドは、歐洲第一と伯林人が誇る華麗なカフェーである。勿論入場料を拂つて這入るのだが、内部の各室は世界各國のカフェーの様式を備へてゐる。印度は印度人、アラビヤはアラビヤ人と云つた給仕を使用し、各國の植物や食器家具を用ひてゐる。三階の大ホールにはルナパークで、朝晝晩の気分を出す。物凄くいほどつかいカフェーである。

此處へN翁の一行を案内しての歸り途、夜更けのバスの中で私は、眠けのさすままにうとうと

とし乍ら揺られてゐた。もう十一時を過ぎてゐたであらう。ふと私は下けた右手に熱い重みを感じて瞳を開いた。其處には思ひがけない、一人の若い女が座してゐる。そうして私の手をぐつと握ると、にゆとしてその眼深く冠つた帽子の下から、色どつた瞳を笑はせた。安價の街路女である。

然し私は、取られた手を引込めると又眼を閉ぢた。すると女は小聲で、

「Cenen sie Douch sprachen」

と來た。

「No. I cant speak」

態と英語で答へてやつた。すると女は、チヨット舌打ちして立つて行つた。私は別にそれを見やうともしなかつた。すると私の前の席へ行つた女はどうやら、其處に居た男にモーシヨンをかけららしい。夜更のバスのこととて他に客として後の方に二三人居るばかりでガラ開きである。

「二馬克をいつは高けいや否、否、俺らそんなに持たないよ。」

下級労働者と見えて、訛りのある下卑た言葉だ。

「一馬克。」

とうとう女の方が折れたらしい。それにしても一馬克で、奴等は何處へ行かうと云ふのだろう。やがて私はバスを下りて行つた。すると彼等も私と一緒に降りて行つた。私の下宿は遼一丁も行つた角を曲れば直ぐである。私はぶら／＼歩き乍ら、ふとポケットをさぐつて、煙草の無いのに氣づいた。さうだ、下宿にも煙草は残つてゐない筈だつた。と云つて煙草屋はむろん閉めてゐる。私は急いで其處の小さいレストラント——毎日私は其處で夕食を喰へるのだが——へ飛び込んで、オバーストルツを受け取ると下宿へ急いだ。するとどうだらう。其の角を曲つた處に置かれた地下室の右側の階段へ、最前の二人の男女の姿がすつと消えて行つたではないか。其れは男子専用の便所なのである。なるほど一馬克の戀、秘密の謎は解けた。それにしてもなんとまあ嗅い一馬克である事よ。

頬の創痕

シーメンス會社の若い工學士R君は、美しい英國型の貴公子然たる美男子であるが、その左

頬から顎部へ掛けて生々しい創痕がある。W博士の眼の下にも耳へ掛けて、かなり眼立つた創痕を見た。一體獨逸の紳士にはよく創痕のある顔を持つてゐる。

だが、それは彼等にとつて唯一の誇りであり、當時の自分の颯爽たる姿を思出させる印象である。即ち決闘の名残なのである。

ハイデルベルヒのヒルシユ街料理店の樓上でこの決闘場を見た時、如何にも獨逸青年らしいスポーツだと思つた。此處では毎日一回二回の決闘が行はれる。今では一種のスポーツに過ぎないが、昔日は戀愛、殊に三角關係から行はれたものが多かつたであらう。

前庭に在る決闘の神碑の前に、決闘の勝者即ち戀の勝利者を取り巻いてビールの盃を捧げる若い大學生の一團を想像しても心の踊りを感じるものだ。

文明國民としては、野蠻だと云へばそれ迄だが、亞米利加國民の熱狂的となつて其のゲームに血をわかすアメリカンフットボールの壯烈と云はふより寧ろ、凄惨な競技決闘——毎年少からぬ負傷者や死者を出す——に比較すると、如何にも軍國的精神の象徴とも思はれて、一層勇ましい氣がする。

大業な武勇傳

日本人料理店花月の食堂、新聞や雑誌の亂雜に置かれた卓に向ひ合つて、煙草を吸い乍ら二人の紳士が話してゐる。注文した料理を待つてゐるらしい。二人共どうやら話してゐる内容から見ると、新聞記者か雑誌記者らしい。其處へ今一人仲間らしいのが這入つて來た。

『よう、昨夜はどうしたの。』

『實に痛快だつたよ。日本だつたら直ぐいゝ種にするんだが。』

『何うしたと云ふんだい。』

『いや、話は實に馬鹿々々しいがね。あれから君達に別れてホテルへ歸ろうとあの通り、なんと云つたけ、とほく歩いてゆくとね、あそこ地下鐵道の入口の脇からひつこり出たんだ。綺麗な奴だつたよ。未だ十八九位だな。ひとつ擲擲つて見るかと、よせばよかつたが近づいていきなり口笛でビツとやつたものだ。そうしてズウユースピークイングリッシュとやつたね。イエスとはつきりとした英語だ。此れは面白いと一緒にタクシーを飛ばした。道は勿論判らないさ

だが着いた家は随分汚なかつたね。しかし俺は奴の家とばかり思つたていつはホテルだつたそう。先づ木賃と云つたやうなものだね。ベットなんか無論スプリング無しさ。隅の方に水を入れたバケツが置いてあると云ふ有様だからね。でも三馬克と云ふ高値だ。南京虫があるだらうと女に云つたら、たまにはねと来た。恐入つたが乗りか、つた船だ、日本への土産ばなしの一ツと、何もかも我慢して泊ることにした。一ツには女がなか／＼英語が達者だつたからでもあつたが。

とろ／＼としたかと思つた時、ドン／＼扉を叩く奴がある。俺は女に誰だらうと云ふと女は慥へ聲で『ボリス』だらうと云ふんだ。困つたな臨検だ。俺はズボンをつけて扉を開けた。

すると這入つて来たのは巡査ぢやなくて、カラもつけない汚い顔した浮浪人態の男だ。何の用かと云つたが、英語だから通じない。向ふも俺が獨逸語が判らないと思つたからだらう。女の方を指さして、今度はその指を自分の胸へ持つて来た。何を云つてるんだいと女に聞くと女は黙つたまゝ、ぶる／＼慥へてゐる。男の奴、又指で女を指して次に自分を指す、そうして手を出した。はゝあこの女、自分の女だから金を呉れると云ふのだなと思つたから、女に此男はお前の情夫か

と聞くと首を振つてゐる。ぢや兄貴かと問ふたがやつぱり首を振る。どうしたんだいと云ふと五馬克ばかりやつて呉れと小さい聲で云ふ。べら棒め、馴合ひの美人局とは此奴だなど、いきなり其奴の胸倉を掴んだ。すると奴、俺の肩のあたりを押したから、俺は得意の腰投げを掛ける脆くもどたりと倒れた。相手がでかい奴だつたから愉快だつたよ。で、押さへて絞めたがね何しろ物音が大きかつたので、他の室の奴が起きて大騒ぎさ。とろ／＼巡査がやつて来て、いろ／＼と聞いたが、さつぱり判らないさ。女に英語で云つて通譯させたが、結局男と女は引張られて行つて、俺は名札だけとられて放免と云ふ譯さ。

「しかし、名札を取られたのは大失敗さ。きつと後から何か云つて来るぜ。」

「大丈夫ホテルも何も書いてないから。大使館へ調べたつて、こつちは明日はもう巴里へ行つてゐるんだハ……。」

なんだか聞いてゐると大變な武勇傳だ。だが話してゐる當人は、瘦せて神經質らしい顔をした五尺あるかなしの風采の上らぬ男、この男が一寸不思議に思はれる。どれほどの柔道の達人か知らぬが、北伯林邊のゴロツキなら、第一、素手などで強迫するやうな事はあるまい。どん

な優しい奴でも短銃は持つてゐる筈、この小男に投げられたとするとよつほど間の抜けた奴か、新米に違ひない。さてよ、此の男やつぱり新聞記者とすると、實際、此の話とは大分隔りがあるかも知れない。殊によつたら、反對に奴さん投げられて、懐中物は残らず奪られたか判らない。それをい、加減に創作して、さても勇ましい武勇傳にしたのではあるまいか。私は苦笑し乍らオバーを呼んで御飯の御代りを命じた。

破 戸 漢 男 娼

ルツチオ公園の脇シイレー街のカフェードブリンで夕食をしてゐると、美しい男裝の小女を連れて四十餘りの好色らしい男が這入つて來た。卵色の乗馬服に鼠かか、つた帽子、兩頬にほんのりと紅をさし大きい空色の腫を輝し乍ら、何處かおびへたやうに、おどくとしてゐる。彼等は簡單に、シチユーとサラダにビールを呑み乍ら夕食を攝つた。彼等は親娘のやうにむつまじく、しかし低い調子でひそく話してゐた。が親娘でもないらしい。戀人同志とも見られない。兄妹と云つた方が一番眞實に近いかも知れない。如何にも美少年らしく扮裝した彼女の美

欠

欠

しきには、Kも引つけられたらしい。私達は最後の一杯のコーヒーを明せずして、ゆつくりと呑んで彼等の出て行くのを待った。

やがて彼等は、勘定を拂つていそぐと出て行つた。

「變んな兄妹だ。後からつけて見やう。」

二人は直ぐ彼等の後を追つた。彼等はルツチオブラツチの廣場の樹下暗を抜けてムツセン街へ出て行つた。賑かな大通りを真直に約二丁横に折れる。角から三軒目の小ぢんまりとした、だが粗末な家の黄色なカーテンを押して這入つて行つた。入口の前へ来た時、次いで這入ろうとした私の肩を押へて、

「おい、這入つてはいけない。」

とKは重みのある聲で云つた。

「此處へ僕達が這入つたら大變だ。君と僕とは兄弟にならなきあならんよハ……。」

そこで私達は、ムツセン街の方へ出て行つた。酒場とのみ思つたその家は、「蜂巢」と云ふ蔭男茶屋であつた。あの美しい男裝の美少女と思つたのは、少女でなく立派な男で、破戸漢男娼と稱

する性的顛倒者であつた。

伯林には、之の性的顛倒者に依つて特別に保護された各種のカフェがあつて、彼等男娼は、此處で女のやうに容と戯れたり踊つたりするのである。「蜂集」はさうした彼等の密會茶屋で、警察はその存在を認めても干渉は決してしない。之れに比較すると、女性同志の斯うした密會所も澤山に在るが、「蜂集」ほど公然とされてゐないので、餘り知られてゐないらしい。

男の少ない獨逸に、斯うした同性愛の機關の公然と許されてゐるのは、大きな矛盾のやうに考へられるが、以來獨逸人は友情を著明ならしめる高い情緒的、感傷的な性情に富んでゐる。現今獨逸には約百五十萬人の性的顛倒者が居ると云はれてゐる。だが此の計算は調査の最少限であつて、其の人口の一〇プロセントだと云はれてゐる。

性的顛倒に關しては古來、多くの文献がある。人間よりも動物殊に鳥類に多しとせられ、それ等の研究もかなり眞面目に行はれてゐる。ソドミストに對しての中古時代の刑罰は、峻烈を極めたものであつた。文藝復興期以後、藝術家の間に一種の流行の型となつて、ミクロアンゼロ、レオナルド、ダヴィニチ等の伊太利藝術家、或は英國の詩人バイロン、官能主義の提唱者オス

カーワイルド、大著述家ポールベエルレーヌ等、人もよく知るエオンストであつた。獨逸に於ては中世紀に最も流行を極め、諸皇子及貴族等が同性愛情の中心とも云はれてゐた。後世それが「獨逸友情」と稱ばれ同性愛の結晶的象徴となつて現はれた。十八世紀に於て、情的放肆な享樂ガルスに依つて提唱され一層其の傾向を擴げ、詩人クライストが後プロシヤの大臣になつた。エルンストとの同性愛など有名な話である。獨逸は種々な性的顛倒者に關しては、最も力を盡して防遏した國であるが、其の研究も獨逸から始まり、文學的に科學の上にもこれが爲めに出版された著書は恐らく其の量、質共に全世界のものより、恐らく超過してゐるだらうと云はれてゐる。

M教授の童貞

「笑つちやいけませんよ。僕としては恐らく生涯の中で一番深い印象記なんですから。」
 ○○大學から社會學研究のため留學してゐるM教授は、少年らしく其の頬を少し紅め乍ら語り出した。

その日は確か土曜日の晩でした。樹々の紅葉が夕風にハラ／＼とちりかゝるチャガルテンの池の端をぶら／＼歩いてゐる。

『もしもし。』

と呼びかける女の聲がします。振り返ると十六七の若い美しい少女です。

『何か御用事ですか。』

『貴方マスモトさん御存じ？』

藪から棒の問ひです。

娘は手提げの中から一枚の寫眞を出して私に渡しました。見るとロイド眼鏡を掛けた、髯の濃い丸顔の好男子です。ハテナ、何處か見覚えのある顔だがと私は心に咳きました。さうだ、これは M 會社支店の S 君に似てゐる。だが S 君はもう三年前に日本へ歸つて、而かも私の日本出發の際には、其の送別會の席上で、種々と歐洲の事情を話して呉れたのだが、と裏を返して見ると「ドクトル・ワイ・マスモト」と達筆な署名、日附は千九百二十六年六月とある。S 君が斯うした變名で、此の娘とロマンスを作つてゐたのであらう。そこで僕は軽い氣分になつて、

『この寫眞の主は僕の友人ですが、マスモトと云ふ名ではありません。』

『ぢやその人について話して下さい。』

其處で、二人は其處の腰掛けにかけて話しました。娘の語る處に依ると、其のドクターマスモトの S 君は四年前、彼女の家に下宿してゐたと云ふのです。彼女の母は四十にならぬ若い美しい未亡人と、S 君は丁度夫婦のやうに毎晩踊り場や劇場に連れ立って出掛けてゐたさうです。その時未だ十三や十四の小娘であつた彼女は、S 君を父と呼んで彼から可愛がられてゐました。さうした三ヶ年は過ぎました。S 君は別離と云ふ悲劇を最後に日本へ歸つて行きました。残された彼女等親娘は、幸福の崖から不幸の奈落へ落された者のする、悲哀と愁歎に暮れてゐましたが、彼女の母はさうした悲歎が原因してか、急性の肺炎で間もなく死んで行きました。残された彼女は、ある會社の事務員として生活して來たと云ふのです。異國人との不自然な戀の破局物語としては誠に月並なものでしたが、私は相手の「マスモト」が、あの日本に居る S 君であると思ふと、只聞き流して済まされぬ様な氣がしました。まあ、云はゞ同情したのです。それにどうしたものが、其時私は妙に此の娘に少年らしい心の動きを意識したのでした。私は人一倍に内氣な性

質で、日本にゐた時だつて此の年になるまで、實際女と云ふものを知らなかつたのです。少年時代から中學教師と云ふ嚴肅な家庭の養父母に育てられた結果か、學生時代はもとより、卒業してからも酒を呑むとか、女に近づくといつたやうな機會をなると避けられてきました。考へると随分馬鹿々々しい話ですが、青春時代に『自己の童貞』と云ふ言葉を非常に神聖視し、その愚かな誇りを年を経るに従つて貴重して來たのです。大分話が反れたやうですが、結局さういふ私は、この娘に同情した結果、日本のS君に僕からこの娘の窮状を訴へて、援助を仰ぐやうにすることを約束したのです。で其晩は公園の出口のレストランで夕飯を喰べさせて歸したのですが、翌日の晩、その娘が私の下宿へ訪ねて來ました。さうして、それから彼女と親しくなつたのですが、彼女の子供らしい體に似ず、性的な知識の發達してゐたのには驚ろきました。さうして、その激しい誘惑にたうとう僕は、二十幾年間戦ひつゝけて來た統性心と云ひますか、その堅い信念を木葉微塵に打ち破れられてしまつたのです。

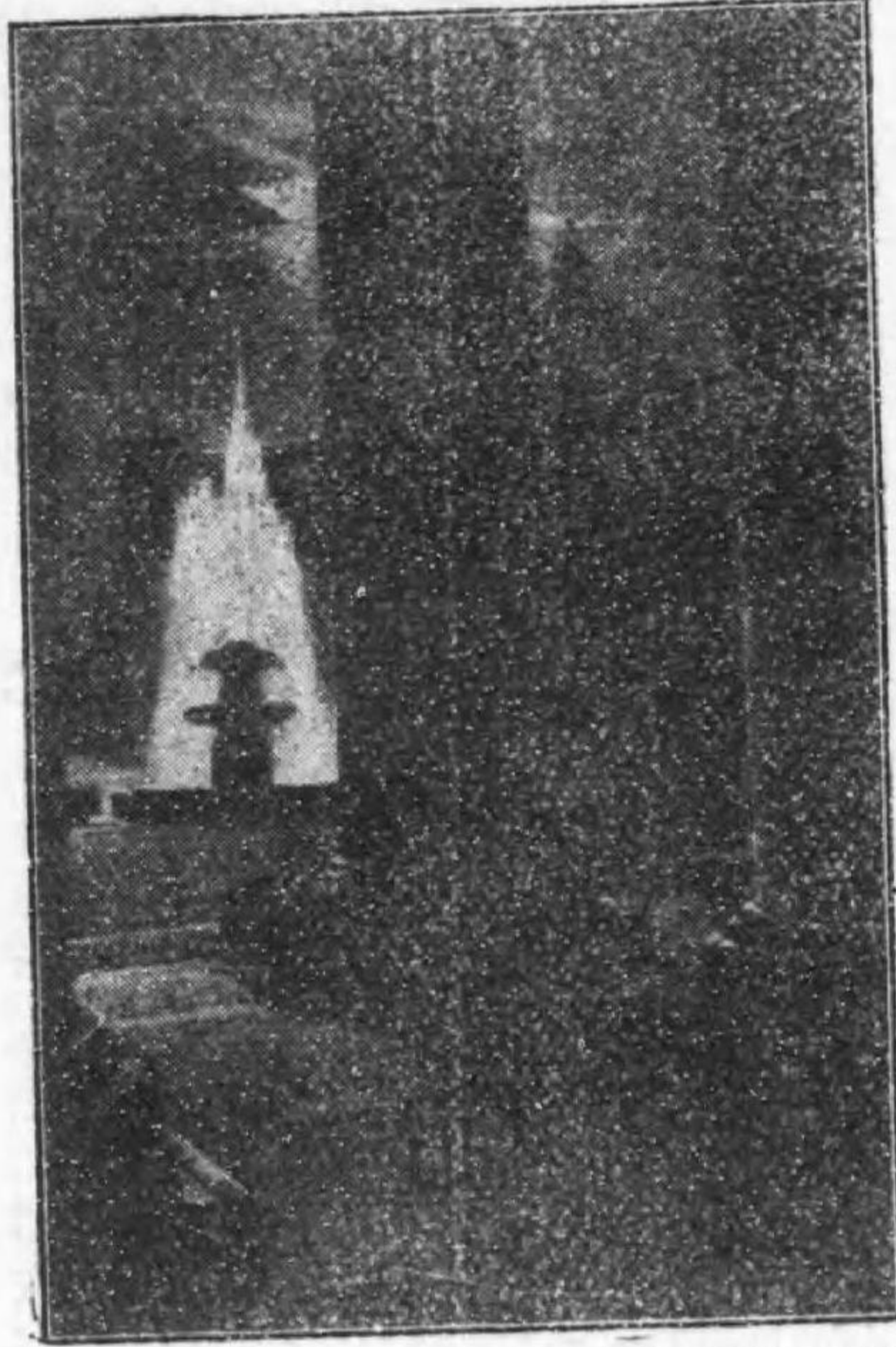
するとどうでせう？

それから二ヶ月目、私の出した手紙に對して日本からのS君の手紙を受け取つた時、私は我乍

欠

女 國 諸 艶 競

女 國 諸 艶 競



サンタマリア寺院

凄い美しさを持った伊太利女、
 天性の娼婦型ロシア女、
 西班牙女は冒險的で
 無口で人なつこいが瑞西女、
 風車のやうな浮氣な和蘭陀娘に
 雲のやうなノールエー女、
 ETC ETC
 所詮、
 地上の罪惡はイブから始まる
 行くところ、
 女、女、女、
 女ならては
 夜も明けないのである。

欠

藤 枕 奇 談

巴里ガル驛から伊太利ゼノワ行の夜行列車に乗る。生憎と夏期避暑客で一杯で、六人乗りの列車に九人這入つたのだから無茶だ。それに夫々手荷物を持つて居るので、座したきり動きも出来ない。窓側に太つた亞米利加女と十ばかりになる女の子をつれた伊太利人夫婦、それに隣り合つて私、その他は若い學生らしい十七八の娘達四人、それが雀のやうに喋りつ々ける。

不注意にも今日になつて切符を買つたので寢臺車を得られなかつたことを今更後悔した。烟草に火をつけると、

「遠慮して下さい。妾大嫌ひなのだから」

と向ひ合つた肥つちよの亞米利加婆さんが云ふ。置かれた荷物に足の踏み場もないやうなところをやつと出て、廊下で窓に向つて烟草を喫ふ。

「どうして中で喫はない。」

女達が云つた。

「あの亞米利加婦人が文句を云ふから。」
と顔をしかめると

「フ、ン可笑しな婆さん。」

一同は、顔を見合せて嘲笑ひをした。

「構ふもんか、皆妾達も喫ふよ。」

其處で、彼女達の一人は英國製のブラックキャットの箱を出すと、皆で一本宛取つて喫ひ始めた。室内は蒙々と煙になつた。亞米利加婆さんは、

「もしく、娘さん達、妾烟草が大嫌ひで。」

しきりに咳をつけた。だが彼女達は平然として止めさうにない。

「英語が判らないと見える。」

肥つちよの婆さんは苦しく伊太利夫婦に云つたが、その夫婦も通ぜぬと見えて御愛相に、にやくと笑つただけである。

「ヘン英語が話せない。話せてもお前さんなんかと誰が話すもんか。」

眼のくるくとした丸顔の金髪が大きな聲で云つた。彼女達は勿論佛蘭西語で話してゐるから、肥つちよの婆さんに通ぜない。彼女達はやがて、ウキスキーの角瓶をとり出して代る代る呑み初め私にも奨めた。さうして大きな聲で唄ひ初めた。鼻の高い瘦せた神経質らしいのが、棚からギターをおろして弾き初めた。

『どうも困つたお轉婆娘たちだ。』

婆さんは、舌打ちして開けた窓へ顔を伏せてしまつた。伊太利人夫婦とその間に挟まれた女子は、珍らしさうにそれを眺めた。娘達は次第に酔つぱらつて来た。トランプのカードを出して靴の上で勝負を始めたが、それも二回と續けなかつた。夜は次第に更けて行く、室内の電燈は消されて、天井に豆のやうな青い電氣が残される。遊び疲れ、酔ひ果てた彼女達はだるさうに欠伸をして、その狭い腰掛に重なるやうにして眠り始めた。私も飲んだウキスキーがよき催眠剤となつて、うつらうつらしてゐるが、何時知らず深い眠りに落ちて行つた。

眼が醒めた。窓のほのくくと白み初めて靜なる夜明である。私は膝の上の重みに今更氣がついて見ると、私の兩膝には右からと左からと金髪の頭が、二つ突き合せに置かれて横向きになつた。

白いあどけない寝顔が私の兩腕の下に、すうくと微かな息をしてゐるではないか。夜中に伊太利人夫婦の子連れが降りて行つたと見えて、彼女達の二人はそれへ寢そべつたのだ。

私は急に立ち上つてやらうかと考へた。だがその無心に寢入つてゐる邪氣のない顔を見ると、急に彼女達の安らかな魂を驚かすことが如何にも罪のやうに思はれたので、そのまゝ再び眼を閉ぢた。

夜がすつかり明けた。彼女達も起き上つた。

『紳士、昨夜はほんとうにいゝ枕を貸して頂いて有難たう。お影でよく寢られました。』
二人は快活に云つて洗面所へ出て行つた。

女 装 の 美 男

暖かい南歐の春の夜。

ミラノのドーモの廣場を私は一人の美しい女と腕を組んで歩いてゐた。勿論、その朧夜の木の下蔭で拾つた女なのであるが、私達はもう三年も五年も前からの戀人同志のやうに語り合ひ乍

「いや、私はまだこのミラノに来て二ヶ月にも経ないから、流暢な伊太利語ではないのだが。私はのんきな書き手である。ミラノ市が持つ古代伊太利の藝術に憧れて足を止めてゐる旅人なのである。」

で、私達はやがて街角のとあるカフェーに這入つて行つた。私達は酒を呑み踊つた。其處には澤山の女達が綺羅を競つてゐるが、その美しくさに於て私の女ローランに優るものがないと見ると、私は黄ろい人種など、云ふ觀念の一切を忘れてオホンと氣取つたものだ。

が瘦せて電柱みたいにひよろ長い年増の女と組んで踊つた時、その女は踊り乍ら私の耳元へ巧な英語で私語いた。

「物好きね、貴方は。」

私は、眉をひそめた。

「何故」

すると女、くすりと笑つて、

「あの人、女と信じてゐるの。」

「勿論」

「だから物好きと云ふのよ。」

「そうでしょう。」

「あの人男よ。でも立派に男を満足させるさうですよ。」

「馬鹿云ふない。」

こいつ嫉いてゐるな。——私は腹の底から込み上げる可笑しさを堪へて席へ歸ると、彼女を連れて外へ出た。彼女の纖弱々々しい腰や、ふくよかな頬を見ると異状な衝動に驅られて、自動車の中で何度も私は彼女の唇を奪つた。

噫！ だが何んとした神の悪戯か、その夜私は世にも許し難い罪惡を強ひられて、宛も夢遊病者みたいな足どりで下宿の階段を上つて行つたのである。

年増女の言葉通り彼は女裝の男だつたのである。然らば何故彼が女に化けてそんな不思議な職業をしてゐるのか、彼は笑つて語らなかつた。

羊を愛して古代羅馬人の遺習の傳統か。

それとも性的顛倒者か。
 醫學者ならぬ私の知る由もない。
 ミラノのホテルパレスの私の室で畫家のP氏は、この不思議なロマンスの鍵を私に解けと語つた。さうして最後につけ加へた。

『それ切り、僕はもう一年半にもなるが再び彼に逢はない。恐らくこのミラノの町から姿を隠したものだと思はれる。』

凄艶伊太利女

羅馬の見物は廻覽車でやつても五日は費す。郊外の舊跡を訪ねたりしたら、どんなに早くも一週間は掛かる。私は最大急行の四日で之れを殆んど見物した。が寺院や城跡や劇場の見物記を書いたら此の行脚集くらゐなもの直ぐ出来るから略するが、流石は古代文化の都だけあつて總てが古典的な匂ひに高い。然し滅び行つた都の面影は兎も角、新しく建設された街でも餘り綺麗な感じは起させない。

四日の見物を終へて羅馬を立つ前の晩、ガイドの日本人Kと一緒に、夜の市街見物をすべく、ホテルローヤルの前から馬車を驅つた。獨り羅馬に限らず歐洲の何處の都會にも、自動車の代用に未だ前世紀の遺物として馬車が使用されてゐる。丁度東京や大阪に未だ人力車と云ふ非文明な乗物があるやうに。

狭い其のくせ、蟲の喰つた古柱にトタンを張つたやうな感じの市街を、涼しい夕風に吹かれ乍ら、のろ／＼と行く車の上から眺める時、大きな時代錯誤を染々と感じた。

サンタマリア寺院前で馬車を捨て、噴水脇の小さいカフェで冷たいビールに咽喉をうるほした私達は、ぶら／＼とホテルへ歸らうと、廣場の樹蔭を歩いて行くと何處からともなく出て来た一人の化粧の女、突然Kの脇に寄つて来た。見ると伊太利人獨特の黒い髪すなりとした凄いやうな美しい女、Kと彼女は何か話し初めた。

『此奴、綺麗でせう。パリチャンヌと云ふ酒場の踊り子ですがね。今夜これから出掛ける處です。さうです。一緒に行かうと云ふんですが。』

時間も早いし、一つ伊太利の酒場も見物して見やうと思つたから、よからうと云ふとKは急い

でタキシードを呼ぶべく街路の方へ駆けて行つた。

すると彼女は私に身を寄せ、其の腕をからませ乍ら何事か私語いた。勿論言葉の判らぬ私は、只英語で、

「僕は伊太利語は話せない。」

と答へた。女にも勿論それが判る筈がない。すると突然、荒々しく後から私の肩をつかんだ者がある。口早に何か云つて居る。日焼けのした麥藁帽を冠つた黒眼鏡の男である。私は思はずよつとして女から離れると身構へをした。男は尙何か云つてゐる。女が何か云ふと、それを叱るやうに抑へて尙私に何事か云つてゐる。實に言葉の判らないほど、不便で情けないものはない。矢庭に彼は私の手を捕へた。私は思はず、

「何をするんだつ。」

と其の手をふり切つた。私の長い歐米の旅で斯うした様な恐ろしい目に遭つたのは亞米利加の市俄古で、ホールドアップに遭つた時と實に此の時だけである。

男は更に氣色を荒らけて私の服の襟を掴んだ。其の時折よくKが歸つて來た。Kは語氣をつよ

欠

To remember you of
the Paris-Rome Journey
and of your
Travel companion
A. Granata
39-70 = 62nd St
Woodside, L.I., New York, U.S.

伊太利旅行中行列で逢つた
イタリアの女子

ボンペーの壁畫

合觀の黄ろい花咲くヴキスベヤス山の急坂を、ケーブルカーで山頂に達し、ヂヤバルヂヤンミ
たいな老案内人に依つて、噴火口を究め、降りて暑い電車で
ボンペーに行く。

一行は私とギ君と、二人の英國紳士と、ギ君に縁のある三
人のヤンキーガールの七人。トマスコック會社のよく喋べ
る伊太利人のガイドは時々面白いシヤレを云つて一行を笑は
せる。

入口の前で電車を降りて博物館に這入る。化石や彫刻や什
器類を見て、灰の中から掘り出されたボンペーの市街に入る

紀元六十二年、ベスピヤス山の大噴火の爲めに當時の文化の盛華を極めた歡樂の都は忽ち焼土と
化し、地下二十餘尺に埋没されたのを今より二百五十年前に發見せられ、七十年の歲月を費して

欠

掘り出されたものである。

石の柱と壁のみの家屋の整然と兩側に立ち並んだ間の三間幅の道路、平たい庭の飛石みたいなのを一面に敷きつめてある。暑い陽の中を蜻蛉がすい〜と飛んでゐる。

崩れた壁、倒れた塙、其處に夏草の茂るにまかせ、黄ろい日向草の花が減びゆくもの、哀れを止めてゐる。

宏大な劇場、頑丈な公衆浴場、壯麗なる寺院、或は賭博場、酒場——爛熟を極めた當時の文化を思ひ浮べて、そゞろ涙を催すものがあつた。大理石に精巧な彫刻をした柱を残す富豪ベツチーの邸内の壁畫は殊に艶麗を極めてゐる。寢室、浴場には思切つたエロテカルな男女閨房の様を、繊細な筆で畫かれてゐる。

ルバナの娼家の軒下には、これは又餘りにも露骨な男性の臓器を何ものかの表徴として置かれてある。

「お嬢さん方、向ふの通りを行つて御覽なさい。大きな舞踏場がありますから。」

三人のヤンキーガールを追ひやつたガイドは何事か看守に云ふと直ぐ鍵で戸を開けた。薄暗い

廊下の左側に二坪ばかりの室が五つばかりに區切られ、石造のベッドが置かれてある。壁、窓、欄間、天井は、物凄いまでに色彩の濃い畫である。寫眞を撮つてもいゝかと問ふと、よろしいと云ふ。持つたアンスコカメラの五十枚入りのフィルムが盡きる迄バチ〜と撮る。すると、どや〜とヤンキーガール達が雲雀のやうに喋り乍ら這入つて來た。

「淑女の這入るところではありません。」

と廊下の入口で、ガイドが大手を開けた。

「なぜ……あの廣場、何もないぢやないの、あんな處へ追ひやつて自分達ばかり、こんな處へ這入るなんてヒドイは」

「でも淑女は見ないがい、でせう。」

ガイドの開ろけた手の下をくゞつて彼女達はひらりと室へ這入つて來た。

「まあ。」

と奇聲を發したが直ぐ、

「なんて素晴らしい藝術品ね。」

には私達は顔を見合はして驚ろいた。
再び元の門口へ出る。カフェーを兼ねて繪はがきや、土産品を並べた家の卓について、冷たいレモナードを飲んでみると、窓の向ふの樹の下で二人の大道藝人が、マンドリンとハーモニカで音楽をやつてゐる。耳を澄ますとそれが君ケ代である。妙にセンチメンタルになつて、差出した帽子に一リラを投げてやる。

『どうです。此の本は』

赤い表紙の寫眞帖を持つて片手のない男がやつて来た。博物館の特別室に置かれた彫刻や、珍しい壁畫を集めたものである。キルバート青年と各一冊宛買求めて其處を出る。

汽車の窓から見える其處の汚い家の二階の窓から、此のボンペーの廢墟にふさはしからぬ美しくして、近代型の女が二人顔を出して此方を向いてにつこりと媚笑した。

ヴエニス御難

ヴエニスの街は水の街、だが水は黄ろく濁つていさゝか失望させられた。夜のグラランドカ

ナル河を、唄に名高いゴンドラに乗つて下る。軸先に赤い酸漿提灯をつけて呉れたのに、兩國あつたりの夕涼みを思出してほろりとしてしまつた。夜の水の街は流石に美しい。

船遊びに疲れて、ビトリアホテルに歸る。もう夜は十時を過ぎてゐた。急に喉の渴きを感じたので、ボーイを呼ぶべくベルを押した。

すると黒い服にエツブロン姿の三十ばかりの眼のぎよろりとした女が這入つて来た。變だな、

晝間のボーイはどうしたらう。

『何か飲み物はない。』

英語で云つたが判らない。佛蘭西語で云つても駄目。手眞似で飲む眞似をして、

『レモナード。』

やつと判つたらしく、微かに笑つてうなづいた。

ポケットから、一リラ銀貨を握らせると、

『有難たう』

とにこつとして出て行つた。あとで氣が付いて壁に張られた注意書を見ると、ベルを一つ押したら室掃除の女、二つ押したらボーイ、三つ押したら風呂とちやんと書いてある。失敗つたと思つたが何れあの女、ボーイにさう云つて運はせるだらうと服を寢衣に着代へて寢臺の上に腰をおろしてゐると間もなくドアが開いた。見ると最前の女が黒服の仕事着を薄紅色のドレスに着代へ而かも薄化粧して盆の上にレモナードの瓶とカップをのせて、つましく持つて來たのである。

『有難う。』

と受取らうとすると、

『否』

とその手を拂ひ乍ら其處の卓に置いて、カップにレモナードを注いで呉れた。さうして、コップを私の唇へ持つて來て、自分も其處の椅子に腰をおろした。一體どうしたと云ふのだ。私はカップのレモナードをぐつと呑み乾すと、今一杯を所望した。女は瓶をとりあけて注いで呉れた。それを呑み終つたが女は未だ去らうともしない。にやにやと私の顔を見乍ら笑つてゐる。

變だ。

私は所在なく、卓子の上の巻煙草を抜いた。すると彼女はマッチを取つて、それをすりつけるのを機會に、すつと立つて私の側に寄ると、並んで腰をおろした。

へーッ。

私は全く弱つてしまつた。

矢庭に大きな手が私の首にまつはる。と、

『馬鹿ッ。』

私はそれを両手で押しのけて立ち上つた。女は『まあ』とあきれたやうな顔。私は嚴然として右手で女を出て行くと戸口の方へ指さした。

女は今にも泣き出しさうな顔をしながら、私を見詰めてゐるが、やがてその顔を両手で押さへて、しをしをと出て行つた。

『馬鹿にしやがる、彼奴、自分のホテルで稼ぐなんて、何て圖々しい奴だらう。』
獨り呟き乍ら、ドアに鍵をおろすと、そのまゝ寢臺に横になつた。

だが翌朝食堂で煙草を買った時、ポケットに未だある筈の十四五リラの銀貨が、三リラばかりしかない。そこで初めて気がついた。

昨夜あの女給仕に一リラと思つてやつたのは、全く同型の十リラ銀貨であつたのだ。するとあの女、たつた一本のレモナードを運ぶに十リラのチップは多すぎる、これはきつと別な意味で呉れたものと思ひつめ、さてこそ、その御禮にやつて来たのだと膝を打つて暫らく苦笑を禁ぜなかつた。

ゼネバ湖畔の花

プラターヌの大きな樹下に並べられた前庭で、折から湖から吹きくる夕風に吹かれ乍ら、夕食を終へるとふらり、ホテル・ナシヨナル・イデルナを出て行つた。

巴里のシャンゼリゼーに似せた、綺麗な落ちついた夕ぐれの街を二丁ほど杖をひきながら、白い石造の長橋モン・ブラン橋を渡つて右へ折れる。

水に向つて突出された涼臺の上では澤山の人達が、涼み乍ら夕食をしてゐる。湖に沿うてつけ

られた広い車道を、すい／＼と自動車が行来してゐる。

それを横切つて行くと、急に三角形になつた廣場、賑やかな灯の街が三方に分れてゐる。角の大きな土産物を並べた店で飾り窓の人形や、カードを見てゐると後ろで、

「もし／＼一寸」と、優しい聲がする。

見ると、まだ十四五の可愛い佛蘭西人らしい少女である。だが言葉は獨逸語である。

「妾、道を間違へてしまつたやうな気がするのですけれど、あのラデ・エン・ビレは、此方の方でせうか？」

と頬の笑靨が笑ふ。

「さうでせう、僕も旅行者なのでよく知らないんだが。」

すると彼女は微笑を深くし乍ら

「一緒にやつて下さらない？」

と甘えた聲だ。

く。

少女は、剛々しく話し始めた。

自分は、元獨逸の貴族の娘で、革命の爲めに両親は此處へ逃れて来て、湖畔でさゝやかな暮しをしてゐるのだ。母親は生粹の佛蘭西人だから、自分も佛蘭西語は達者に喋べるなどと。

やがて少女の云ふまゝに、湖畔に向つた。そして其處のカフェーに這入つた。

「なにを食べます?」

「さア、あたし……」

「アイスクリームはどうです?」

「それがいいわ。アイスクリーム。」

二人の前にアイスクリームが運ばれた。私は彼女がすくふ銀の匙の白い手に、あどけない愛着を覺えた。

と、その時扉を開けて、陽氣に笑ひながら這入つて来た二人の日本人、私の姿を見ると、

「やあ。」

と聲をかけた。

羅馬の回覧車で名刺の交換をした大阪のS會社のB技師君とM君の二人に不思議にばつたり出會つたのである。

「この娘、何時から一緒です?」

とB技師、

「いや、ついさつき、角の土産品店から一緒になつたのです。」

と、二人は顔を見合せて意味ありけに笑つた。

「獨逸の貴族の娘だと云つたでせう? これでこゝでは有名な辻君なんださうですよ。なあお嬢さん。」

M君は、いかにも無遠慮な態度で蔑すむやうに娘の顔を覗いた。すると、其娘、氣まり悪さうに卓を離れると、すつと外へ飛び出してしまつた。

「昨夜ね、奴を橋の上で散々からかつてやつたものですから覺えてゐたのでせう。連れの獨逸青年がね、お前は獨逸の貴族の品がないとか、十年経つてもお前は、やつぱり十五だらうなど

、云つて、最後には一法宛で三人を引受けるかなんて云つたものですから、すつかり怒つてしまつて、逃げて行つたんですよ。』

M君は、愉快に笑つた。

『どうです、一つ變つた處へ案内しませうかね。』

たつたゼネバで二日先輩の二人は、もうすつかり探検をやつたと見える。間もなく三人は、其處を出るとタキシードを呼んだ。

湖畔を真直に走り、二曲りした處で車は止められた。

閉められた鐵扉を押して這入つて見ると、内からパチンと電燈が燭つた。古い絨氈を敷いた階段を二つ上つて行くと、突當りに青く塗つた扉、馬蹄形をした真鍮の環を引くと、リン／＼と音がして、その扉の中程の五寸直径の丸穴から、眼が覗く。

『俺達だよ。昨夜来た日本人だ。みんな居るか？』

M君が云ふと、直ぐ扉が開いて六十ばかりの品のい、老婆が、

『どうぞ。』

と慇懃に迎へた。

狭い廊下の突當り十疊ばかりの室、中央に卓と椅子、兩側に長椅子、入口の横にはかなり立派なグネクターの蓄音機が置かれてあつて、佛蘭西物らしい見事な大きい裸婦の額が二つも飾られてある。

『此處で昨夜三時半迄踊りましたよ。』

と無口なB君が云ふ。間もなく三人の女が這入つて来た。

斯んな處にゐる女として、珍らしく皆きちんと服をつけてゐる。酒が来る。蓄音機が鳴り出した。M君もB君も昨夜で馴染になつてゐるから女達とよく喋り乍ら踊り出した。

『此處は之れで、非常に堅い家ださうです。否、公娼といふのぢやないでせう。ですが此處の女は、よく別荘なんかへ出掛けるのださうです。恰度日本の家政婦と云つた調子なんです。ですから、皆きちんとした服をつけて、どことなく素人らしく見えるでせう？たいていは事務員とか、タイピストと云つた職業婦人の副業と云つたところでやつてゐるらしいです。

ホテルのボーイに案内されたと云ふ程あつて、成程ヒドク鷹窟染みてもゐない。隣りに座した

女に、

「君は職業は何？」

と尋ねると、恥しさにうつむき、小さい聲で、

「賣子なんです。」

と云ふ。

何處かのデパートメントか何かで働いてゐるらしい。

「一體に、瑞西の女は内氣ですね、山や湖の靜かな大自然に育まれて來た國民は、どうしてもさういふ傾向になるらしい。その癖腹は太いんだが。」

M君は大分酩酊して來たらしい。隣りにも大分、客が入り込んだやうだ。賑かな笑聲が漏れて來た。

窓から眺めると、湖の水に映つた家々の灯が、綺麗に輝いてゐる。

靜かなゼネバの夜はしづかに更けてゆく。

瑞西の映畫館

ホテル。アンテルナショナル前の街角の、果物屋の隣りの薄暗い入口の凹んだ階段を上つて丸く、くり抜いた窓から二法の白い汚く穢れた葉書大の入場券を買ふ。

列車の都合でゼネバで泊つた三晩目、夕食後所在なさに這入つた活動小屋である。卵色のカーテンを押して這入ると、黒服の婆が、懐中電燈を足元に照し乍ら案内して呉れる。

内部は日本の場末の寄席と云つた精々三四百人を收容し得る廣さ。でも中央のボックスが一等席らしい。處々に丸い石柱が立つてゐる。後の席の人はさぞ見悪からうと思はれる。あめりかの南部の田舎街の十仙映畫だつて、もつと明るく綺麗だが、世界の別荘地の瑞西にこんな小さく汚い活動があるかと驚かされる。

管絃樂團のボックスが舞臺の横に在るのも變つてゐる。それとて五六人のボロく禮服姿の舞つ面だから心細い。映畫は、獨逸製の戦争物らしい。字幕が獨逸と、佛蘭西の兩國語で左右に現はされるのが一寸變つて妙な氣がする。

中世紀の英國の騎士らしい服装をした男が盛に敵を倒し、船の帆のやうに短袴をふくらました眼の大きい王様の姫かなんかと結婚するハッピーエンドで、室が明るくなる。どやくと観客は席を立つて入口へ出て行く。涼みに出るのである。此處に限らず歐羅巴の劇場や寄席ではよくこの休憩に観客が外へ出るのを見た。ガランくとベルが鳴る。どやくと人々は再び席へ着く。

今度は、亞米利加物である。而かも馬上からパンと短銃を打ち、牧場の近くで罌粟の帽子の青年が、少女と戀を語り、悪漢を砂丘に追かけると云つた無邪氣なカーボーイ物語である。でも観客は熱狂して拍手してゐる。ラブシーンで青年と少女がシャボテンの蔭で接吻するところでは相互に隣つた観客の男女は、舞臺をそちのけに、自分達も接吻をし合つてゐる。管絃樂のボックスへ、何時の間にか三四人の若い女が這入つて行つて、太鼓叩きや、トロンボー吹きとふざけてゐる。

「嫌だね。」

私の後に居たキザで輕薄な事に於て世界第一の國民であらうところの亞米利加夫婦でさへ小

聲で私語いた。

やつと閉場て、外へ出たが十時過ぎ、入口の軒に列をなして並んだそれらしい頬の赤い女が、眼で物を云つてゐるのを避けて、ホテルに歸ると、帳場に居たカイゼル髻の番頭が、何處へ行つたと云ふから、活動小屋へと云つたら。

「物好きな、紳士の行く處ぢやありませんよ。」

と笑ふ。

「リゾール水や石炭酸を持參して行つたんでせう。二法女の腋臭の匂ひと南京虫に攻められて、體中を腫らした旅の佛蘭西男が市立病院へ昨日も入院したと新聞にありましたよ。」

とつけ加へた。いやはや恐ろしい活動を見たものである。

身代り時計

維納に着いた四日目、朝十時になつてもT公、姿を見せない。いゝ天氣ではあるし、市内見物の時間が減るのでいらくしてゐると、けたましく電話のベルの音。

「オイ島君か、助けて呉れ、大至急。」

T公の聲だ。ひどくせつかな調子、慄へてゐるやうだ。

「何うしたい、風邪でも引いたか。」

私は態と落付いて會我之家式な聲で笑つた。

「そんな處ぢやない。兎も角助けて呉れ。」

「助ける。殺されかけてでもゐるのか。」

「オイ、戯談云ふない。俺は今とても困つてゐるんだ。直ぐ金を持つて救ひに来て呉れ。俺は未だ朝飯も食つてゐないんだ。場所かグラーパーン街の、そら昨夜一緒に行つたらう。あのカフェーの直ぐ裏だ。三階の窓から俺が顔を出してゐるから直ぐ判るよ。」

ハア奴さん、とうとう昨夜悪い女に引掛つて人質になつてゐるんだな。直ぐ服に着代へてホテルを出るとタキシードで急がせた。昨夜の華やかな不夜城は何處へやら、眞に街は白け白けとして歩道は紙屑と犬の糞だらけだ。車を降りて、裏通りに折れる。

「オーイ、此處だ。」

赤白い寢不足なT公の顔がうらなりの飄箏が風に揺れてゐると云つたやうに、汚い木賃宿の三階の窓に浮んでゐる。いゝ態だ。それでK大學教授文學士と云ふ面かい。と腹の中で苦笑し乍ら入口へ這入つて薄暗い鐵製の階段をごとく上つて行つた。

「サンキュウ、とも角金を貸して呉れ、十シルでいゝんだ。」

むさほるやうに十シルの札を私の手から取ると、彼は室を出て行つた。やがて歸つて來た時、掌に大切さうに一個の古い銀側時計をのつけて、元氣よく、

「歸らう君。」

は少々現金過ぎる。表通りに出て料理店に飛込んで、卵とパンを肉屋の前の野良犬みたいにむしやく喰つたT公、やつと胸を撫でおろして云つたものだ。

「昨夜あれから、女の家に行つて泊れば無事だつたが、彼奴どうも餘り善良でもないらしく思つたので、あのカフェーリツツに這入り込んで、とうとう奴を撒いてやつたが後がいけない。出掛けに素晴らしいマドンナに拜調したもんだから、ふらくと腕を貸して行つたのがあの木賃ホテルさ。だがI can speak Englishと云つた女は、それだけ知らないアイキャント、スピーク

で皆目通じない。處で二十シル呉れと云ふ。ポケットに手を入れたが無。何處で掏摸れたか落したか今も判らないが、兎も角文なしの無錢遊興者さ。事情を云つたがさつぱり通ぜず、やうやく手真似で金が無いと云ふと、女は怒つたね。戯談ぢやねいよ、この阿呆丹位云つたらう。物凄権幕で、床をどんく踏み鳴らし乍ら出て行つた。後から出やうとすると悪漢に扮したヤンニングスみたいな恐ろしい髯面の大男が、腕を掴んで歸さない。室へ再び連れ返されて何か云ふ。八シルと云ふのだけ判つたが結局、ホテル代を出せと云ふらしい。両手を擴けて一文も無いと云ふ手真似をやると、いきなり、胸のポケットから、鎖を掴んでこの時計を奪つて下へ降りて行つたが、もうその時が四時過ぎさ。酔も何も醒めて疲れ切つてゐたので、まよと寢臺にそのまゝ、寢込んで、起きたが九時過ぎ、君に電話をした次第さ。」

「そいつは氣の毒だつたな。が一體その銀時計でよく十シル貸したもんだね。」

「これは君上等だよ、古くつても。」

「恩賜の時計かい。」

「否、だが之れは十年前に佛蘭西大使館附の武官をしてゐた伯父から貰つた瑞西製のとても

高價な品ださうだよ。」

「で財布は。」

「落したと思ふね。掏摸れてはゐない。四五シル位這入つてゐたかな。」

「でも命に別状なくて何よりだつた。」

「金よりも時計よりも昨夜のマドンナが惜しかつたよ。」

「のんきだな君は。でも恩賜の時計でなくて何より結構だつたよ。女郎屋の借金の抵當にまさか命を捨ててもせまいてハ……。」

彼は、大學の優等卒業生で英國に留學中の秀才である。日本だつたら、吉原の話さへ口にもしないほど真面目な大學教授であるが。

「どうも維納は僕には鬼門だよ。」

T公は顔をしかめた。

踊り子の部屋

ヘッテーは維納の歡樂街ケルトネルリング街の酒場の專屬踊り子である。彼は爪先に於て特殊な舞踏藝術を持つてゐる。彼女のファンは日本人に多い。彼女が黒い髪をしてゐる伊太利人である事が、日本人に好かれたのかも知れない。

彼女は一週間酒場から百シルの給料を貰ふ他に、その約五倍位な過剰収入があり、市立公園の附近の立派なアパートの二階に、公爵夫人のやうな豪華な生活をしてゐる。

彼の室は、應接室と寢室と湯殿からなつてゐる。

應接室は、十二疊敷位な廣さ、床には高價な緑色の絨氈を敷き、壁には、水邊に遊ぶ古代羅馬人の男女を畫いた密畫を飾り、一臺の佛蘭西製ピアノと、アメリカ製の蓄音機、中央の卓には銀の煙草盆と同じく磨かれた銀製の酒瓶に盃、隅の飾り戸棚の上には、香ひのい、エチプト葉巻に、各種の酒瓶が整然と置かれた。窓からはマロニエの綠葉をそよがして、新鮮な初夏の太陽が覗き込むと云つた氣持ちのい、部屋である。

寢室に隣つた湯殿、これが又すこぶる氣取つて三方の壁は鏡を張り、中央に置かれた大形の大理石の浴槽の右には、同じく大理石の卓が置かれて、酒瓶と盃が置かれてある。右手の棚に置かれた舟形の青銅の置物の中には香水に油、クリーム類を入れた洒落れ方である。ヘッテーとコバルト色で織り出した大形のタオル、市松の大柄な日本の浴衣が入口の壁に掛けてある。

寢室——黒柿？らしい黒光つた木製の寢室、枕もとに同じ色の瀟洒な卓の上に、水瓶とコップ現代的な水色の三角笠を冠せた電氣スタンドと、銀色をした電氣煙草火附、右の隅に置かれた飾り棚の上の一段には元祿風な姿の博多人形に並んで都踊り姿の京人形、壁に立てかけた菊五郎の助六の華かな大形羽子板、中段には、青紐の附いた金象眼の柄の小刀腰差に並んで、黒塗の女用足駄が恭しく飾られてゐるのは一寸妙な感じ、下段には絹張りの赤い日傘と、丈三尺餘りの大人形を入れた桐の箱、朱塗り金蒔繪の手文庫は古めかしい。

正面の淺黄色の更紗を張つた壁に、看板の椽の大きな絹扇、金地に櫻ちらしと云つた物凄なものを中心にして右横に秋聲と署名された、絹地へ墨繪の山水、だが表装はなくピンで止めてある。左横には、牡丹の繪の色紙に定家流の達筆で『南畝の何とか空の』と書かれた銀短冊何れも凝つた

ものである。左隅に置かれた衣装戸棚には、煌やかな夜會服、立てられた黒塗の衣桁に、紅の友
 縞の長襦袢、藤色の裾模様附縮緬の紋付、緋色の下帯。紫地に三矢の女紋付羽織、立縞の御召の
 男鞆着、淡紅色の支那婦人服等、雜然とかけられてゐる。
 寢臺の平行に置かれた二つの長椅子の上には、横にすると鳴く、熊の人形だの袴姿に大刀を佩
 いたチヨン鬚のサムライ人形がちよこなんと座つてゐる。
 何から何迄、すつかり日本物づくめである。金紗の長襦袢を御丁寧に着た、部屋女王
 ヘツターは、淺草海苔と鹽煎餅に、綠茶を入れた九谷焼の茶碗を私に差出した。
 彼女は日本の役者の噂をした。殊に映畫女優に就いては、日本の映畫フワンの少女位な智識
 を充分持つてゐる。黒塗金時繪の手文庫の中からは、日本の風景、映畫俳優の繪はがき數百枚、
 日本から彼女へ宛てた鼻の長い彼女のファン？から送つた自惚れ澤山の齒の浮くやうな文句の手
 紙の何束が現はれた。

『日本の紳士は親切だね。』
 と微笑すれば、

『お前もその一人だらう。』

と女王は、綺麗に揃つた白い齒を見せてにつことした。

さうです。女王様、少くとも今夜だけはね——と私は腹の中でくすりと笑つてやつた。

和蘭陀少女

千九百二十八年の七月の末。

私は巴里からアムステルダム行の、軍用列車のやうに満載せられた列車の乗客の一人として和
 蘭陀に向つた。

それは、私達日本人にとつて永遠に記念すべきスポーツ史の一つを残した第九回萬國國際オリ
 ンピック競技を見ん爲だつたのである。ところが、私は列車がアムステルダムに着くと、私の無
 謀を今更悔ひなければならなかつた。即ち私は、御大典の京都や、東京震災の避難民のやうに
 宿なしの憂目に遇つたやうな者であつた。ホテルと云ふホテルは、どんな場末の最下等なのも
 満員であつた。後で聞いた話だが、もう三四月頃からホテルは豫約の満員であつたさうである。

さて停車場の祭りのやうな雑踏の中で、私は、如何にも憐れな旅行者として暫らくトホウに暮れてゐるが、ふと亞米利加へ渡る太平洋の船の中で知己になつた、和蘭陀娘クリスチナの事を思出し、手帖に書いて呉れた彼女の住所を便りにタキシシーをヴァリア街に走らせた。

彼女は想像以上に宏壯な邸宅の娘で、父のベルゲンと共に喜んで迎へて來れた。彼女の父ベルゲンは私と船の中でテツキゴルフの共同者であつた。少し禮儀を缺いた無謀な願ひであつたが、私は素直にホテルのない旨を告げて世話を頼んだ。彼女は心よく一室を私に貸して呉れ、毎日彼女の父と、彼女の従妹のアンナと一緒に彼女の許婚のハイド青年の運轉する自動車で、競技場へ見物に連れて行つて呉れた。

彼女は香港で生れ十九年を過した關係上大の東洋ビィキであつた。従つて日本選手の優勝を祈つて呉れた。陸上競技場では私は、日本人の座した席へ別れて行つたが、そこで計らずも伯林に居る友人のKに逢つた。

「何、そんなセーネの家に居るのか、俺も泊らして呉れ。」
と、とう／＼無理にやつて來た。

織田選手が三段飛で首位をしめる。人見嬢が八百米で優勝する。其處へ、織田選手が水泳で世界的驚異の河童振りを發揮した。私達は躍り上つた。ベルゲンの一家ではクリスマスのやうな騒ぎをして祝賀會をして呉れる。

毎日私達は近所の小供達から、紙を持つて來られて署名や日本字を書いて呉れとせがまれる。私は下手な日の丸や、富士山や、和歌や詩をそれに書きなぐつた。悪戯なKはふざけて、飄筆やだるまを書いてゐるが後には『馬鹿野郎』だの『助平』だのと書きなぐつた。

彼女の従妹アンナは、ヘーグの女學生で態々、オリンピックク競技見物に來てゐるのだが、未だ十六の鶯色の髪をした可愛ゆい娘であつた。私は、彼女に與へた扇子に櫻の花と富士山を書いて與へた。歸り際に彼女が見せ乍ら、これは何と問ふた時、私は思はず顔を赤めた。扇の裏にはKの手跡で、

——私は貴方を愛します。日本へ歸つても永遠に貴方の事は忘れないでせう——
と達筆に記してある。

私は、クリスチナにその意味を通ずると、彼は笑ひ乍らそれをアンナに通じた。彼女は顔を赤

らめてうつむいて仕舞つた。

さて私は巴里へ、Mは伯林へと夫々歸つて行つたが、その後伯林へ行つた私はMから、思ひがけぬ、アンナの手紙を見せられて驚ろいた。

『ぢや、あの時もう出来てゐたのか。』

と問へば、

『さう云へば、ざつとそんなものだね。和蘭陀娘は早熟だね。僕此の冬又和蘭陀の風車見物に行きたいと思つてゐる。』

と彼は笑つた。

それにしても、あの扇の文字の意味を聞いて、恥しさうにうつむいた小羊のやうな小娘が——と思ふと油断のならぬは女性だなど、思はず微笑させられたものである。

葡 萄 牙 女 氣 質

ミラノから瑞西行の列車の中の出来事である。ボーイが寢臺を作りに来たが、未だ早いので、

腰をかけたまま、雑誌を讀んでゐると、便所に行つた同室の獨逸人が、ドアを開けて出て見ると云ふ。

首を出して見ると、私達より三つ目先の郎屋の前で、四十餘りの大きい體の伊太利人が、二十四五の色の白い佛蘭西人の手を搦んで、大聲で何か云つてゐる。側から好色らしい三十位な伊太利人の女が、しきりと喋つてゐる。佛蘭西人が何か悪い事をしたと見えて、しきりに詫びてゐる。其處へ車掌が来る。ボーイが来る。結局ゴタ／＼して車掌が、その佛蘭西人を連れて、次の列車へ去つて行くと、事件は意外に早くかたづいて皆々、室へ這入つてしまつた。だが私の室の獨逸人先生、なかく歸つて來ない。寢ようと服を脱いでゐるとやつと歸つて來た。話を聞くとなるほど面白い事件だ。

私が伊太利人と見たは、葡萄牙人の夫婦で、男は賭博好きな處から、後の列車の知人の室でトランプ勝負を始めたが、運悪く負けつ／＼けたので、妻の金を持つて來てもう一勝負やらうと、室へ歸ると扉は内から鍵を掛けられて開かない。可笑しいとドン／＼叩くとやつとあけて、女は頭が痛いから眠つたのだと云ひ譯をした。

しかしどうもその素振りが可笑しい。妻を押しつけて寢臺の上の毛布をはねのけると、若い男が飛び出して来た。其處で男は猿のやうに怒つてその男を引出し罵つたと云ふ喜劇である。

で、車掌のつれて行つた佛蘭西人は、どうなつたかと云ふと、自分の室へ歸つて其の友人に手眞似で大ほら吹いてゐたと云ふのである。

女が食堂で、その佛蘭西人と知り合ひになつて、亭主の留守を幸に自分の室へ引張り込んでふざけたと云ふのだ。

だが、場所が列車の中と云ふのも珍らしいが、姦通した女房を又、可愛がつて一緒に室でむつまじく寝ると云ふのも放らしくて面白い。

「お蔭でい、題材を得た。」
と、新聞記者だと云ふ獨逸人は、黒革の手帳にそれを書き乍ら笑つた。

列車ロマンス

リエージュで伯林行の列車を漢堡行の寢臺車に乗替へたT——巴里で劇を研究してゐる青年戯曲

家——は、相客のない室に獨り廣々とした心持で、直ぐ寢着に着代へて横になつた。

汽車が動き始めた頃、突然ドアが開いて、さも周章た恰好で一人の女が、黒革の鞆を手に這入つて来た。毛皮の外套を脱ぐと、華やかな流行服を着けた三十近い貴婦人である。掛けた金縁の鼻眼鏡もキザに見えず、美くしい顔に何處やら氣品を備へてゐる。だが一體男獨りの室へ這入つて来て、何んとも感じないかしら。すると女

Tは黙つて眼をつぶつた。

「もし〜、もし〜」

Tのカーテンを揺ぶつた。

「ハア。何か御用ですか。」

狸寝も出来かねて起き上つたT、

「濟みませんが、妾を下段で休ませて頂けないでせうか。」

「さあ、どうか。」

Tは寢臺を飛降りた。

「済みません。それから妾もう一つ御願があるのですが。」
 「何御用です。」

立つたまゝ、干物のやうに堅くなつてTは答へた。

「まあ、此處へお掛け下さい。」女は其處にTを掛けさせると手提げの中から、赤い切符を取り出して、「お恥しい話ですが、ブラッセルから、廊下で立たされ通して来たのですよ。で、リエーシ驛で驛員にチップを握らせて、此處に遣入つたのですが、間もなく車掌が来るでせう。妾どうしていいか判りません。」

今も泣き出しさうになつてTの方に身を寄せた。

高い香料と、甘酸ばい肌の匂ひがTの心を掻き亂した。 (五十三字削除)

間もなく、車掌が乗車券の調べにやつて来た、Tはポケットから、チケットと寢臺車券を出して見せ、別に赤い切符に對しての増額と寢臺車券を支拂つた。その上、出て行く車掌のポケットに五法のチップを投げ込んでやつた。

「済みませんでしたわね。」

「何、御心配に及びません。」

此ロマンティックな物語を乗せた列車は、やがて漢堡の驛に着いた。

白耳義の貴婦人と稱した女と、わが親愛なるロマンチストTは其のブラットホームで堅く手を握つてさよならをした。

恐らく、といふより絶対に、次の瞬間からは、此の地上で再び相逢ふことさへない路傍の人として。

西班牙女の話

それあゝとても話の外だね。佛蘭西だの獨逸だの田舎へ行つたら皆さうだと云ふけれど西班牙人位其點で解放的な國民はないね。海國的とでも云はふか、冒險好きな西班牙人は、確かに自然が彼等を解放してゐるんだね。僕達の仲間でも皆云ふことだが、田舎へ寫生にでも出て見給へ。三脚を立てゝいざ、スケッチにかゝらうとすると、すぐ其の側で、妙なうめき聲がする。見ると其處の草叢で犬のやうに丸くなつて轉つてゐる。そいつを見ると、折角の藝術的感興も何も目茶

苦茶だ。急いで其處を逃けて、適當な場所を選ぶと、其處でも亦轉がつてゐる。甚だしいのは僕のキャンパスを二人で覗いて見て、すぐその側で轉がるのだからたまらない。無論彼等は戀人同志だらうが、さうでないものもあるらしい。百姓の娘が繪を覗いて何時迄も逃げないから追拂ふやうにすると飛びついて首玉にかちりついたりするのが

31-7-28

*Firm a woman of
no importance,
Danta Juliana
of rue de Jussieu
Fontenay aux Roses
Seine.*

西班牙の子イサ

ある。淫賣ぢやないんだよ。素人娘だが、一體西班牙人は日本人を好いてゐるさうだよ。これは別な話だが日本の領事館にゐる人が、田舎へ鐵砲打ちに行つて草叢で、雉を發見し、周章へて發砲した。元來雉は立ち打ちするもので先づ犬に追ひ出させてから雉が空に立つ時打つのがほんとうだが、素人だもんだから、雉の姿を見ると矢庭にどんとぶつ放なした。すると、わあと云ふ聲と共に其の草叢から二人の若い男女が飛び出して逃けて行つたさうだ。草と草との隙から動く、赤い女の靴を雉の頭と見違へたのださうだが随分滑稽な話さ。其の時の男女の驚ろいて逃げた恰好もだが、打つた本人の顔も、さ

ぞい、漫畫だつたらうと思ふよハア……。』
巴里で油繪の研究をやつてゐるM君のある日の話である。

モントカトル挿話

賭博の都としてモンテカルロの話は、餘りに有名である。だが灼燦眼をあざむく賭博場の見物をしたゞけで貧乏で、とても私達のポケットマネーなどでは、何うにもなりさうもないと、きつぱり諦めつけた私達は、その夜カシノの酒場で拾つた二人の「皇族の姫」と稱する、怪しくも美しい女と、靜かで小粋なカフェーの一室で、踊りに疲れた體を休めた。さうして彼女達の云ふまゝに、トランプの賭を始めた。勿論、金高にある制限を設け、彼女等はその體を、私達は法札を賭けるのだが、仕合は單純な「ブリツチ遊び」でも流石は賭博の王城の女だけあつて愉快だ。

夜の十二時から始めて、午前四時迄に私は半勝、E君は全敗、翌朝十一時から又始めてその夕方六時には、E君も私も半勝。

翌日の朝、ホテルに歸つてE君を待つたが姿を見せない。

やつと夕方になつて、腫れほつたい腫をして死人のやうにふらく歸つて來たE君、どうしたと聞けば、

「昨夜夜通し勝負をして、負けつゝけとく／＼懐の金も時計も指環もピンも、カフスに至る迄も奪はれて仕舞つた。濟まないが此のボーイに、タキシードを渡して呉れッ。」

と世にも情けない顔で、寢臺へ倒れた。

「始めは勝ちつゝけてね、女の猿股迄取つてやつたんだがね。今朝方、呑んだコーヒーが嫌に甘酸かつたと思つたが、それ以來次第に負けるんだ。何しろ一回百法と纏り上げたからね。」

E君、つく／＼慨嘆し乍ら云つた。

「でも、場所がモンテカルロだ。負けて歸ると云つても恥ぢやない。」

西伯利亞鐵道夜話

列車は今、ヅキカル湖畔の闇を走つてゐる。氷雨が窓を打つて寒い晩であるが、スチームに室

の中は上衣を脱ぐほどの暖かさである。

夕食を終つて食堂に居残つた、邦人乗客T大學教授のT老博士を頭に畫家M氏、金持ちの坊ちゃんDさん、陸軍少佐のS氏日獨混血兒の久美子嬢、N高等學校教授で日本に歸化した獨逸人H氏に私、トランプや麻雀遊びにも厭いて、今夜は各自歐米旅先土産話の座談會を開くことになつた。

先づT老博士、熱いコーヒーを啜ると、その温顔に微笑を浮べ乍ら靜かに口を開いた。

「何しろ、この鐵道で毎年歐洲へ飛脚みたいに往來する私だから、そらあ随分失敗談も多いが、初めての旅行者と違つて、奇抜な赤毛布談はない。最初の渡歐と云つても、もう四十年も以前の話で、大學から留學生として獨逸に行つた時は随分ユーモラスな失敗談もあつたが、今忘れて一寸思出せない。」

女の話？ 俺の様な朴念人には、とんとそんな美しくいロマंचツクな思出はないね。女と云へば妻より知らないがその妻には早く先立たれて、娘達と生活して來た俺だからハ……。それに、古稀を過ぎた皺苦茶爺に戀のロマंचスを語れと云ふのも無理だねハア……。

さうさね。最近の女難とでも云ふのを話さうか。
 昨年の夏だったかと思ふ。少し調べ物をしたと思つて瑞西のインターライケンのホテルで、
 一人のタイピストを雇入れた。すると其の翌朝七時頃未だ私が床の中に居る時、そのタイピスト
 が訪れて来た。私は顔も洗はず、急いで服を着けて彼女を室に招じた。その女は十七八の佛蘭西
 人らしい褐色の髪をしたとても物凄いなほどの美人。私は巴里のオペラや、ミコズツクに餘りに這
 入らないが、舞臺に出る踊り子のやうな立派な服装をしてゐる。私は少し變だと思つたが、羅馬
 字の原稿を差出してこれをと云つた。すると黙つたまゝ、それを受け取つて原稿に暫らく眼を落し
 てるたが、

『これは日本のお前の可愛い人に送る手紙か』
 と、にやとした。

『違ふ、私の譯書だ』
 と云ふと、

『なるほど、お前は日本の大學教授だった。』

と顔中に媚笑をつくつて、いきなり私の首つ玉にかがりつくと、

『ね、ね、一週間二十法呉れるでせう。』

と私語いた。私のその時の驚ろいた顔は諸君の想像におまかせしやう。いやはや、全く膽をつ
 ぶしたね。私は女を拂ひのけると、室を飛び出して階下に降りて帳場の番頭に、どうも怪しから
 ぬではないか、あんなヒドイ女をよこすなんてと嗷鳴ると、番頭先生平氣なもんだ。

『旦那は日本の博士でせう。お金持ちのね。此處は避暑地のインターライケンですよ。タイピ
 ストでも、あれは飛切りの上玉を選んだ筈ですエへ……』

と来たには私も握つた拳のやり場に困つた次第さハ……。
 もう一つ。

これは、さうさ、ちと古い話だが、丁度大戦が終つて間もない時だったから震災前後の事だつ
 たらう。今は餘り見ないが、その頃伯林には女のタキシード運轉士が澤山ゐた。運轉士どころか當
 時は殆んど女の労働者でやつてゐた伯林だった。何しろ帝政時代の馬克が紙屑同然になつた直後
 だったから、男手のない伯林では女は喰ふに困つてゐた時分だ。

で、ある晩私は大學前の友人を訪ねてホテルへ歸らうと、チアガルテンの林の中で、一臺のタキシードを拾つた。そのタキシードが例の女の運轉手君だ。ところが乗る時に、

『旦那、前の席がよろしかつたらお乗り下さい。』

と笑つたもんだ。さう、三十四五の美くしい年増だつた。

『いや後がい、』

とその時は何も考へず答へたが後になつて見ると、つまり變な餘業をやる女であつたらしい。

ポストダムのホテルの前に止まると私は賃金を拂ふうと『メーター』を見た。すると、

『六馬克呉れ』

と女が云ふ。たつた三哩そこ／＼に六馬克とは目茶だと思つたが、變な女と却つて文句を云へば、こつちが負けた。悪いタキシードに乗つたがこつちの不運と、鞆口を開けると折悪しく小銭がない。紙幣の百馬克札を一枚出して釣銭をと云ふと、にやあと笑つて外套のポケットから無難作に十馬克、五馬克札を掴み出して素直に勘定通り九十四馬克釣りを呉れた。

『ダンクセーション。』

と勢よくドアを閉め、疾風の様に去つて行つた。さて翌朝、ホテルの前の果物屋で大使館のK君へプレゼントと思つて林檎を買つて昨夜の釣銭を出すと、

『旦那、御談話を。』

と果物屋の婆さんが、黄ろい齒をむき出し乍ら笑つて受取らうとしない。何うしたと聞くと此れは帝政時代の舊紙幣で、一文にもならないと云ふ。ポケットから出した九十四馬克の札を見て

『旦那は紙幣の蒐集家であるのか。』

と云ふ。いやもう腹が立つやら口惜しいやら、いきなり其處の溝へその紙屑の九十四馬克を投げてホテルへ歸つて行つた時の氣まりの悪るさつてあらしめない。今思出しても不愉快な話さ。だが私だつたからよかつたがこれが若いK君なんかでもあつたら、とてもこんな位な被害で済まなかつたかも知れんねハ……

次は髪長いM畫伯、火酒の盃を管め乍ら語り出す。

——僕達のやうな畫かきの生活を赤裸々にマドモセツル久美子などの前で話すことはどうかと思ひます。構はない。よし、ぢや話ませう。怪奇的な伊太利女の物語です。

僕の友人E、勿論日本人ですとも、彼は僕達と御同様モンバルナスの貧しいアパートの屋根裏でパンと水とで生命をつなぎ、展覧會に自己の藝術を認めさせんことに喫々たる南京蟲みたいな生活をしてゐる憐れな畫家の一人です。

ところである夏の日、彼はシャンゼリゼーか何處かのカフェーで一人の美しい令夫人と御友達になりました。さうして女の云ふまゝに彼女の郷里である伊太利の南河岸へ旅行したものです。彼と彼女は海岸のホテルに泊つて彼は好きな繪を毎日畫き、夜は彼女との甘い抱擁に亞米利加之富豪か、イングランドの貴族みたいな豪華な生活を約十日續け、おまけに三千法からの立派な指環迄指に光らして堂々と巴里の宮殿ではない屋根裏の巢へ歸つて來た譯ですが、巴里の驛でその令夫人に別れた切り再び逢はないさうです。それに可笑しい事には彼はそのところのホテルでは一晩も彼と彼女と同じ時刻に寢床に這入らなかつたと云ひます。晝間彼は海岸で彼女の紹介で、いろいろ美しい貴婦人に逢つて一緒に茶を飲んだり、食事をしたりしましたが夜は何故か彼女は彼を室に残して出て行つた切り遅く返歸つて來なかつたさうです。それに夜は必ず室の電燈を消して置く事、翌朝迄決して口を利かぬ事等と云ふ條件が付けられてゐたさうです。

夜遅く歸つて來た時の彼女は、たいてい酒氣を帯びてゐたさうです。もう一つ彼は、夕食後、室に歸ると必らず彼女と一緒に、一杯の白葡萄酒を呑まねばならなかつたさうですが、それを呑むと妙に眠くなつて、氣持よく寢て、そのまゝ、たいてい朝迄ぐつすり眠つてゐたさうです。

彼はお蔭で、乾魚のやうに瘦せ、金魚のやうに飛出した眼玉を光らして歸つて來ました。そこで變態性慾研究家て有名な詩人のG氏に依ると、それはきつと、E君は、伊太利の閑散婦人の爲めに弄ばれたものださうです。つまり、彼女達は東洋人と云ふ異國的な、男の匂ひを肌に接してグロテスクな獵奇心を満足せしめたものです。勿論彼を誘ひ出した女は、日本式に云つた男娼紹介常習者とも云つた女なんぞでせう。晝間、彼が逢つた貴婦人と云ふのがその客で、即ち彼は無意識の裡に、彼女達に御目見得した譯です。E君は色の黒い唇の厚い、さうですね、日本人離れがした寧ろ南洋の土人の兎貴位な犖犖な顔をしてゐます。それが返つて彼女達に好まれたのでせう。

何んにしても、これなど巴里でも一寸聞かない話です。

お次はS少佐。

— 軍人ですから女の話しはしてならないと云ふ事はないでせうが、生憎醜男でロマンスは持ちません。が、一體アメリカの女は一番癪ですね。威張らすから増長するんでせうが。アメリカの旅で一番不愉快なのは、女に對しての度外れた禮儀ですね。紐育の電車の中で、足を踏んだまゝ知らん顔してゐた女が餘り癪だつたから肩を押したら、失敬な奴と怒鳴り、とうとう電車が止まり巡査が來ると云ふ騒ぎ、僕も負けずに帝國の軍人だと名刺を出してやつて、場合に依つては大使館へ行つて大いにやる考でしたが、女が最後に謝まつたので我慢してやつたなど、少々こつちも色氣のない野暮な軍人氣質を丸出したものでしたが、どうも幾何僕が要領悪い男でも、アメリカ女なら、向ふから來ても御免ですね。

英國の女は、情に深いと云ひますね。だが古風で、何處か貴族の姫らしい氣どり方が鼻につきますね。佛蘭西女は小柄で、小股でちよこ／＼歩く處は、一寸日本人に好かれさうですが。やつぱり世界で一番綺麗でせう。しかし、巴里の市内電車で黒服の女車掌が、あのでつかいお尻で、ぐん／＼内側へ乗客を押し込む光景は一寸幻滅ものですハ……。

女房にするなら獨逸女ですね。親切な點では、日本女性にも劣りませんでせう。

露西亞女は一體 境遇から、素朴で柔順です。復活のカチューシャなど代表的な露西亞女でせう。僕の女研究などつまりません。D君、君は東洋のプリンスと呼ばれてゐるやうな色男だ。

一番興味なのを聞かし給へ。

若いD御曹子、S少佐に冷かされ、美しい頬を紅らめて徐ろに口を切つた。

僕が一番心に残つた戀人——斯う云つたら日本の許婚の女はさぞがつかりするでせう。嫌ですT先生冷かしちゃ。そんなに澤山あるのですか。妖婦なら随分澤山ありましたが、戀人と名づけるのは二三人、それでも多いつてハ……。内密、内密。

その相手と云ふのが、倫敦のチャング、クロスで花賣娘だと云へばMさん、詩になるでせう。孤兒で十七歳の處女。いよく、谷讓次あたりが好んで書きさうな創作ですね。僕は久米正雄に書かせたいと思ひます。

獨逸へ來て東洋のプリンスで伯林人を煙に巻いた島田清次郎ぢやないが、僕もいゝ氣なもので日本の伯爵と自稱してゐるから押しが太いでせう。彼女はすつかりそれを信じてゐたのです。僕も惜しけもなくバツバと金を費ひましたが。カフエー遊びをしてゐる時の事を思へば、大したも

のぢやありません。

ケンシングトン街で家を持つて、同様三月、飛行機でドバーを空中旅行と洒落て巴里に行つたり。スコットランドの田舎を訪れたり、いやもう、日本の老爺にでも知れたら全く勘當以上と云ふのほせ方でした。

處が、此處に不思議な事には、或る日、彼女の姉と稱する二十五六の女が訪れて來ました。彼女はいエスト街の地下鐵人夫か何かの家に生れて、姉妹はないと稱してゐました。突然彼女の姉と稱して現はれた女には僕もいさゝか驚ろきました。ところで小さい時別れて旅稼ぎの藝人になつてゐたと稱するその姉ロエスが、とてもヅキオラによく似てゐました。彼女はアボロ座の踊り子をしてゐました。ところでモツバツサンの『告白』を逆にしたやうな物語が出來ました。だが姉のロエスは『告白』の妹マリグリットのやうな柔順な女ではなく、僕に毒を喰はす代りに心を奪つたのです。彼の老練な戀愛術は僕の心の髓迄、喰つて仕舞ひました。御定まりの三角關係です。妹のヅキオラは、すつかり陰鬱になり、床に就くと急性肺炎で脆くも逝つたのです。ところで、姉のロエスは告白しました。

『妾は何んて惡魔でせう。妹でも何んでもない眞の他人の屍に花を投げ乍ら微笑してゐるなんて。』

僕は氷の柱を呑んだやうな氣持ちで彼女の顔を眺めたものです。さうして云ひました。

『ちよなら、ロエスよ。』

僕は巴里へ向けて寂しく旅立ちました。可愛さうな、小女ヅキオラの思出は滯歐三ヶ年の一番僕の心を打つものです。僕が創作的天分に恵まれてゐたら、もつとく貴方方を感激させる事でせう。嫌にセンチメントになりましたね。H先生一つ逆に日本女の感想でも聞かして下さい。

『私、駄目ですね。日本にもう二十餘年居ますが、家内と一緒にですから、日本の女の人世界でいちばん貞淑です。たゞそれだけです。たゞ』

獨逸人H先生は巧な日本語で云つて笑つた。

『島君は最後だ。一つ。』

隣つた老博士は私の肩を叩いた。

私は勿論話した。

だが、讀者諸君はその話がこの本の何れかの一つの話である事を、想像して頂けば重ねて私
 此處に書くまでもなからうと思ふ。

只一人の處女久美子嬢が、この男達ばかりの勝手な話を最後迄静かな聴者として、或は時々
 胸に手を當て、眼を丸くして驚き乍ら聞いている事は彼女が純の日本娘でなく、而かも日本の女
 學校を出て七年も獨逸で教育を受けた關係からでもあつたらう。

ワルソ一の街路女

ポーランドの首府ワルソ一の驛に着くと、停車場前で執拗くタキシードが市内見物を奨める。歐
 洲大戦の結果、露西亞の壓制から脱れて更生した國で、貧乏臭い感じがその汚い市街に漲ぎつて
 る。

自動車は少なくなつて、荷馬車や、自轉車の多いのが眼につく。繪はがきを買はふと探したが、
 それさへ見つけられない。驛に近い公園のベンチで休んでみると、二人のそれらしい女が近づい
 て來た。彼女等は、此の汚いポーランド人の中でも如何にも新人らしく、スカートの短かいヨー

ロッパ風のドレスを着けてゐる。

「お疲れですか。」

拙い獨逸語だ。だが彼女達としては精一杯だらう。

「何處か茶でも飲みに行きませんか。」

連れの女はや、巧みだ。

「時間を持たないから。」

「あら、時間、汽車、そうして支那へ歸るの。」

「支那でない。日本だ。」

「日本。」

一體、そんな國何處に在ると云つた妙な顔、あ、戦争の爲めにやつと浮び上がったやうな劣等
 國民は可愛相なものだ。

君達よ。君達の兩親や兄弟は且つて驚の羽をひろげた國旗を掲げて、私の國と戦つたではない
 か。そうして君達の同胞は傷つき倒れ、私の國は一躍世界列強の圈内に這入つて、今や東洋に於

ける一大勢力となつてゐるではないか。

君達をもつと學ばなければいけない。たとへ、君達が路傍に貞操を賣る女であらうとも、

私は、すつくと立ち上つた。そうしてほかんと口あけて、あきれ顔をしてゐる二人をそのまゝにして驛の方へ歩き出した。

妖精 オルガ

「オルガ、そいつはい、名だね、オルガ、オルガ。」

私は踊つてゐる足も宙に二三度眩くと、思はず大きい聲で、

「オルレンカ。」

と叫んだ。

私の記憶の何處かに残つてゐた、チエホフの短篇「愛人」の主人公オルガの愛妾オルレンカを思出したのである。すると彼女はさもびつくりした表情で、

「貴方、なかく露西亞通ね、話せる？ 妾の國の言葉。」

「ナイン。」

私は首を振つた。

彼女は私の肩に置いた指先にぎゅつと力を入れると、

「貴方のテーブルへ行つてい、？」

と云つた途端、ジャズが止んだ。

私は別に返事もしないで、自分のテーブルへ歸つて来た。

「どうだつた軽いだらう。彼奴はもと踊り子だつたさうだからね。何か口を利かなかつたかへ？」

Sが、向うの隅のテーブルに歸つて行つた。黒いドレスの瘦せてすらりとした彼女を見返り乍ら妙にニヤ／＼して尋ねるのである。

「うん、此處へ来てでもいい、かつて云つたよ。どうした？」

「まさか、來たくたつて來れるものか、僕がこゝに居てはね。」

「どうして？」

僕が恐いんだよ。奴はあれでとても凄いだからね。僕が此處へ来た時、初めてあの怪しい眉笑に引かかつて、たうとう奴の家に行つたんだがね。その晩持つてゐた金、さあ百馬克近くあつたらう全部とられた。ヒドイ目にあはせやがつたんだよ。で、それから暫らくして僕も餘程カフエー遊びに馴れたから、その家へまた行つたんだが、ウント夜通しふざけてその時翌朝財布を振つて見せて、一馬克のタキシードを呉れるとやつたもんだ。怒つたね。しかし僕その時こないだの百馬克で、もう一度位來られる筈だとすつと、とびだしてやつたよ、とても痛快だつた。だからいまさら僕の處へ來られない譯さ。

これは、二ヶ月前、伯林のカフエー・ベルツでの話である。

その妖精オルガを、私は今莫斯科の停車場で偶然に見たのである。

彼女は毛皮の外套にすつほり身を包んで、如何にも貴婦人らしい態度を造りながら、連れ露西亞人の男と、むつまじけにほがらかな笑ひを交へては話して行く。私はちよつと驚いて彼女をちつと見つめてゐた。

「随分熱心に眺めてますね、そんなにお氣に入りましたか。」

欠

欠

生らしい娘がやつて来た。

「ちや一緒に出掛けませう。」

ガイドの名は、メリー、彼女の母は英國婦人だそうである。

一緒に外へ出て直ぐ電車に乗る。雨が降り出したので電車は一杯の客だ。乗客は珍らしそうに私を見る。さうして私と話してゐる彼女と——あの黄色人種と、どんな關係だらう位な興味を持つて——じろくくと見てゐる。然し、彼女は更に平氣な顔で、叮嚀に私に窓から見える建物や街の名を説明して呉れた。クレミレン宮殿前に着くと雨が止んだ。

電車を降りて這入ると直ぐ彼女はレーニンの幄の垣内に長い外套を着て、銃剣を斜に構へている番兵に、紹介状を見せて何事か云つたが、要領を得ぬらしい。其處で、出口の屯所に這入つて行つて、下士らしい男にそれを示すと、にやくと笑ひ乍ら、其處に居た兵士に私を幄舎に連れて行く様命じた。平家建の屋内に安置された英傑レーニンの屍を見て、出ると私達は其の前の群衆を抜けて赤の廣場へ出た。群衆の中を通る時、彼女はひびたりと私に身をつけて、

『ポケットを氣をつけなければなりません。澤山の拘摸です。』

と耳打ちした。革命で名高い時の鐘を仰ぎ、赤の廣場に出る。十四世紀以来の仕置場で、一九一七年の大革命には殊に多くの非過激派の人々が、殺害された處である。青赤に彩られたパジリウス寺院の圓塔を左に、クリムリン宮殿の赤煉瓦塀に沿ふてモスコー河畔に出る。その斜面になつた芝原で、薔薇色の頸巻を頸に巻いた、青い外套の男が短かい白襦衣をつけ、赤い布で頭を巻いた美しくい少女の脊に手をかけて、しきりと話してゐる。

「ツルゲルネフの小説の中の情景だ。」

私は思はず呟いた。中學時代に讀んだ二葉亭の譯したツルゲルネフの短篇あひびきの男女を思出したからである。

「ツルゲルネフ」

彼女は、私の日本語で呟いた言葉の中で、此の名だけは耳に止めたらしい。

「貴方、ツルゲルネフ、讀みましたか。」

「エ、彼は露西亞で私の一番好きな文學者です。」

「トルストイは。」

「人道主義者の、あの人は勿論尊敬します。だが寧ろ僕はドフトウキスキーが好きです。」

「ゴルキーは。」

「嫌ひでもありませんが、好んで讀みません。チエオフ、ブースキン、ゴーゴリの方が好きです。」

「なかく、貴方文學通ですね。昨年の夏日本のカブキが來まして第二藝術座で演じました。大變な人氣でした。」

「見ましたか。」

「い、え、妾達、貧乏ですもの。」

恥しさうにメリーはうつむいた。

河畔の行路樹道を折からの夕陽を踏んで幾組かの、化粧の女が通つてゆく。それが私達と合ふ毎に、何事か私語さ合ふ。

「妾と貴方と歩いてゐるのを不思議がつてゐるのです。モスコーにはあんな哀れな女が澤山ゐます。革命後一層殖えました。ソビエト政府は、あゝ云ふ女を救済して始めて、革命の眞價を認

められるのですが。

ミス、ナリーは、流石にボルセビキーの國だけ在于てなかく卓見を以つてゐる。

黄金色に光つたニコライ教會堂、ブーシキンの銅像などを見物して、再び電車でロザンスキー停車場へ歸つて、其の前のレストランに這入る。大きな室であるのに卓や椅子は汚い。彼女は私の爲めに、おいしい鶏の丸揚げを注文して呉れた。

「露西亞は貧乏です。お國のやうな富んだ國から來られると、此の惨めな生活をしてゐる、妾達の窮狀がよくお判りになるでせう。モスコは二百萬に近い大都市です。それなのに、交通機關として僅かに電車のみです。自動車だつて三千臺あるかなしでせう。金がないのです。あの廣漠たる西伯利亞を開拓して無盡の財寶を獲得する時が來るのは何時のこととせう。革命に煩はされたとも云ひます。だが帝政時代を思出しても身震ひがつかます。妾は、母に英國式な教育を受けて來ましたのですが、今ではやはりボルセビキーです。」

ミスメリーは瞳を濕ませて語つた。停車場で別れる時、報酬の他に一留のチップを與へると、彼女はそれを押し頂くやうにして私の手を堅く握つた。

列車に這入つて買った繪はがきや、寫眞帖を見ると、何時の間に書いたか、その露西亞字の下に叮嚀な英語で説明が書いてあつた。

列車娼の話

西伯利亞鐵道の沿線の驛々では、列車の止まる毎に停車場や、構内の線路を短かい袴に斷髮の歐風な装ひをした若い女が、物思はしげに歩いてゐるのが見られる。

白樺の荒木で造られた嚴重で、非藝術的な停車場の建物や、赤い布で頭を被つた勞農ロシヤ女と對照して、彼女達の如何にも近代的な色彩が眼立つて見える。彼女達は、カツ／＼と潤達に大股で歩み乍ら、ちらりと列車の窓へ微笑を浴びせたりする。

鶏の丸焼だの、白樺細工などを賣る驛の露店へ立ち寄つたり、藥罐へ湯を取りに行く折、よく彼等はうろ覚えの獨逸語や、英語で聲をかけたります。

露西亞通の陸軍將校のS少佐は彼女達に就いて話して呉れた。
「つまり彼女達は、列車娼とでも名づけますかな。娼婦中でも、ジブシーらしい傳統を傳へて

るる彼女達です。驛から驛へ、相手の客の要求に応じて一緒に行くんです。日本なら遠出の藝者現代では銀座街頭のステッキガールてな部類ですよ。

西伯利亚出兵の際など、赤、白兩軍共よく彼女達娼婦を、間諜として使つたものです。某國の若い士官二人が、赤の間諜の娼婦から列車中で、魔睡薬入りのウオツカを吞まされて、ハバロフスク郊外の氷上に屍となつて曝された時など、同じ列車に居た私達も、彼女達が實際、赤の間諜だなんて夢にも思ひませんでしたよ。戦争當時はチタ邊には、之の兵隊専門の娼婦が、とても多く随分跳梁したものです。列車の中で稼ぐ奴ですか、例の便所が何時間も閉まつた限りで空かないと云つた話でせう。珍らしい話ではありませんが、三等客の一番下劣な奴には時々あるらしいですね。

列車がウラルの白樺の間を抜けて、オムスク驛に着いたは、冷い雨の降る暮方であつた。

日本富豪番附に載つてゐるほどの財産家で、關西××會社長の息子さんと、道樂に巴里で劇研究をやつてゐたと云ふY君と私は、繪はがき店の前で、素晴らしく肉附のい、コケツトな女に出逢つた。するとY君何を思つたか、

「ハロウ。」

と側に寄り、

「シンパシー。」

と笑つたものだ。すると彼女は一寸その美しい眉をひそめたが、直ぐ白い綺麗な歯を見せて「ハロウ。」

次いで、べちやくと何か云つたが、もとより二人共、S少佐から教つた「貴女を愛します」のシンパシしか知らないのだから始末が悪い。

「NON・NON・HIT・NON・NON・アイド・ン・シンパシー。」

英語、獨逸語、佛蘭西語、ごちやませの否定で二人は、手を振り乍ら逃げるやうに列車へ飛び込んだ。すると後から付いて來た彼女は、とうとう私達の室迄這入り込んだ。

「困つたな。」

と、もて餘してゐると、丁度通り合せたT老博士の姿。

「先生、助けて下さい。シンパシーと云つたら、此女が付いて來たんです。」



美しくしい毒蛇

西伯利亞餘聞

露西亞美人

「ぢや一ツ今晚は、その赤い國の物語りでもしますかな。勿論朴念人の軍人上りだから、文學者や詩人のやうに興味を引くやうに話せませんがね。ありのままの事實を話すまで、す」
S 少佐は斯う云つて手にした火酒の盃をぐつと一息に乾して除ろに話し出した。

と云へば老博士、鮮やかな露語で吐りつけるやうに早口で何か云ふと、恨めしさうに口を歪めて涎々出て行つた。「トムスクか、カンスク邊迄御共しやう」と云つてゐると博士に云はれて、二人思はず顔を見合せ乍ら云つた。

「ヘーッ。あのシンバシーは、なか／＼よく利くんだね。」

U市の司令部からT、Uの軍事輸送の重要部と認められた、R町の停車場司令官として赴任した間もない日のことである。

その頃は過激派の跳梁はやうやく露骨になつて、白軍は連戦連敗を續け首領のセミノヨスキー等生死不明を屢々傳へられたものだ。元來R町はシベリア鐵道の最北端即ちアムール河から六十餘露里の地點に位し、人口僅かに三四千の小都會であつたが、將來アムール線の大鐵道工場設置の計畫がある程の重要な地點である。従つて日本軍も一ヶ中隊の守備隊を駐屯せしめ、停車場司令官を置いて過激派の襲撃に備へたものである。

であるからR町にはたくさん「赤」が入り込んで居た。彼等は日本軍の駐屯と共に、多く附近の山へ逃げ込んで居た。非常に大膽な奴が、良民に化けて巧に私達の目を盗んでは、山に籠つた赤軍本據へ通信してゐた。それには多く女間諜があつた。彼女達は實に驚ろくべき巧妙な動作を以て、纖弱い女性の身であり乍ら聯合軍の將校に近づき軍事の秘密を探るのである。それには彼女達は實笑婦となる方法を選んだ。彼女達としては、蓋し之の方法が一番近道であつたからであらう。

既に御存じの様に西伯利亞は赤白兩軍の劍激の巷と化して以來、極端に疲弊して良民は、飢餓と困憊の極度に達してゐた。だから生活の糧を失つた婦女子は、斯うした場合何處の女性も古來踏んで來たやうに、貞操を賣つて辛ふじて飢餓を脱してゐた。彼女達は公園に街道に、夜晝の差別なく現はれて、僅かに一度のパン代と自分の尊い貞操とを交換した。殊に停車場には列車が着く度に、紅白粉に身をやつした彼女達がホームのあつち、こつちをゆつたりと歩いてゐるのが見られる。斷つて置くが西伯利亞の鐵道は内地にあるのは少々趣を異にしてゐて、大きなステーションを除いては殆んど内地のやうに、プラットホームの設備がない。だから列車が止まると乗客は、線路の上から直に降りたり降りたりするのだ。

キレーに着飾つた實笑婦が、すなり／＼と線路のほとりを、そろそろ歩る姿を窓から見る乗客は手まねをして彼女達を呼び、氣に入つたら列車内に招じ目的地迄同行するのだ。斯うした類の實笑婦は、公園や街道に現はれるものより身なりもよく、言葉も下品でなく、時には素晴らしい服装をして、恰も貴婦人の如く見誤られる事さへある。従つて「赤」の間諜として實笑婦となつてゐるのは多く此の部類に屬してゐた。

ある日、私は軍務の爲めにM町へ行くべく汽車に乗った。平素私は停車場司令官として出張する場合に軍服を着けて、私の爲めに設けられた特別列車に乗つて、好きなウオッカでも飲み乍ら寝ころんで旅行するのであるが、その日はある重大な任務を帯びた事柄であつたので、態と支那服を着けて、列車も一般乗客と同乗して行つた。

先づ列車に乗り込むと、私は室内を一わたり見まはしてから、入口のドアに一番近い空いた座席に腰をおろした。そうしてポケットの奥底に納められた重要書類に手を當て、其の無事なるを確かめると、その手をズボンのポケットの短銃にやつた。つまり私は列車内の萬一を慮かつたのだ。私はそれを終るとやつと落付いて室内を注意深く見まはし初めた。もう列車は動き始めてゐた。私の猫のやうな瞳はふと私から六七人目向ふの一人の美しい若い女、十八九の紅頬な美少女で、如何にも良家の令嬢風を装つてゐるが斷髮の具合、衣装の着け具合が、何んとなく腑に落ちない——賣笑婦だな——私は心に叫んだ。しかし列車内に斯うした女が、男を漁りに乗り込んでゐる事は、前にも云つたやうに、西伯利亞名物の一ツとでも云ふのだから、別に珍らしいとも何んとも思はなかつたから私はすぐ瞳を放つと、ポケットから新聞を出して読み初めた。間も

なく列車は次のS驛に着いた。私は新聞紙から眼を放つて見るとはなしに、丁度私と一直線を行つた位置に座してゐる彼女を見た。彼女は其の時開けられた窓から注意深く、乗降の客を見つめてゐた。

「誰かを探してゐるな。」

と私は直感したが次の瞬間

「もしや彼女、女間諜ではあるまいか。」

稻妻のやうに私の胸に感じたものがあつた。よし一ツ彼女の行動を注意してゐてやらう。私は妙に緊張して、奇を好む何んとも云へぬ心よい気分が私の全身を流るゝを覺へた。しかし彼女は求むる者を見出さなかつたと見えて「チエツ」と舌打ちをして首を引込めた。列車は再び動き出した。私は感づかれない様に新聞を読んでゐる風を装つて、その瞳は絶へず彼女に注いだ。彼女はその白い指先に象牙の針を巧みに繰り乍ら編かけの毛糸を編み初めた。如何にもそれは殊勝らしく見えたが、彼女の瞳は時々斜め後に注がれるのに氣がついた。彼女の斜め後には霜降りのおバーに、黒いソフト帽をや、眼深く冠つた年齢三十五六の紳士——一見醫者か、辯護士と云つた

風に見えるが葉巻を銜へ乍ら、雑誌を讀んでゐた。しかし彼の瞳も絶へず斜め前の彼女に注がれて、どうやら彼と彼女の瞳は一つの見えない糸でつながれてゐるやうであつた。そうして確かに絶へず彼女と彼とが眼で話してゐる事が知れる。彼女は編針を持つ手を上にあけたり横にしたり又は空中に十字を書いたりした。すると彼も、自分の頬をなでたり帽子をとつて見たり、煙草を口から離して、それでやはり十字を書いたりして答へた。それは極めて自然のやうに行はれてゐた爲めに、室内の乗客には勿論氣づかれないやうであつた。

私は「いよく此奴變な奴だぞ」と心に叫んで注意し始めた。かくして三ツの停車場を通過してやがて列車はT驛に着いた。T驛は此の鐵道沿線に於て、有數な大ステーションで、乗降の客も非常に多く、混雑するのが常であつた。すると私が間諜と疑がつた彼女は、小さなパツクに編かけの毛糸をつゝ込むと、そゝくさゝ降りて行つた。勿論彼女と眼線電話——少し可笑しな云ひ方だけれど——を交はしてゐた怪しい紳士も姿を消してしまつた。

「なんだ馬鹿々々しい。普通の賣笑婦だつたのか。」

私はその愚かな早慮を嘲笑つて思はず苦笑した。がしかし五分の停車を終へて列車が再び動

き出した瞬間、私の神経は極度に緊張するのを感じた。それは確かに降りて姿を消した筈の彼女が再び姿を此の列車に現はしたからである。彼女は昇降口から悠々とした足どりで這入つて來るや室の中央に進んで、丁度今其處に腰を下したばかりの某國の若い士官の前の空席に靜かに腰を下ろした。

「ウム——さうだ。」

私は私の最前よりの疑惑が徒勞でないことを堅く信じた。それにしてもあの士官は危険だ。見れば未だ血の氣の多い二十六七の青年であるが、彼女の誘惑に引かゝらなければいゝが——私は口の中で私語き乍ら注目した。あゝ、しかし私の杞憂は遂に適中してしまつた。列車が次の驛に着くまでには士官と彼女とはすっかり仲よしになつて、面白さうに笑ひ崩れる程度に進んでしまつた。列車は次のS驛に着いた。すると彼女は窓から首を出して、何人かを探すやうに見えた。私もそれとなく立つて昇降口へ出た。すると私は思はず「あッ」と叫ぶと首を引込めた。私達の列車の直ぐ隣の列車から彼女とT驛までサインし合つてゐた紳士風の男が顔を出して、右手をしきりに上下に振つてゐるのだ。

「いよく、彼奴等は間諜に違ひない。」

私は自分の席に歸ると、何も知らない、あの若い士官——其の顔に、さも満悦さうな笑をたへつゝ、コツ／＼と軍刀で床を打ちならしてゐる姿を見ると、彼が數時間の後を想像して可憐でたまらなかつた。私はどうかして彼にそれを告げて魔の手から、救ひ出してやりたいと思つた。然し次の瞬間には否々私とても、重大な使命を帯びてゐる體である。下手をやつて私自身も彼等の捕虜になつたらそれこそ大變だ——だが然し、祖國こそ異にしてゐるけれど等しく、過激派を敵として戦ふ所謂味方の一士官である。どうかして救つてやりたいものだと思つても彼等にはどんな深い謀計があるか計り難い。善良な旅客として乗り合はせてゐるこの列車の乗客の中に彼等の一味が交つてはるやしないだらうかしら。私はあれこれと思ひ悩んだ。ふと士官は席を立つた。その時私は彼が便所に行くだらうと突作に豫感した。そうして殆んど無意識に席を立つと直ぐ近い便所のドアを開けて這入つた。實に、機會だ。私は彼を彼女の手から救はなければならぬ。しかし私は如何なる方法であの士官にそれを告げ可きであらう。私は暫らく腕を組んで考へた。彼はもはや恐らくドアの前に來て居るであらう、出がけに注意してやらうかしら。それにしても

一體私はどう云つたらいいのか。

コツ／＼コツ／＼。

ドアを叩たく音がした。あ、彼はドアの前に來てゐる。口早やに「彼女は間諜だ注意しろ」と云つて出やうかしら。否それは餘りに拙い、如何に小さい聲でも直ぐ乗客に知れてしまふ恐れがある——ウムさうだ私は手早やく萬年筆をとり出すと、私の眼の前の壁板に Be Carefull と書いた。

コツ／＼コツ／＼。

再びドアをノックした。

私は周章乍ら she is と書いた。

コツ／＼コツ／＼。

私は遂に次の Spy を書き残したまゝ、急いでドアを開けた。其處にはさもなく不愉快さうな顔をして、士官が待つてゐた。私は席に着くと士官があゝの文字を讀んできつと、氣づいて呉れたことだと信じた。きつと今に出て來たら私に Thank you と口で云はなければ眼で感謝す

るだらうと思つた。間もなく士官は出て来た。しかし彼は私の期待をむざむざと裏切つて、そくさと自分の席へ歸つて行くとすぐ彼女と笑ひ崩れた。

SPY を書き落したのが悪かつたのだ。殊更英文で書いたのは上出来であつたが、彼は遂に氣がつかなくなつたと見える。私は失望した。間もなく列車は驛に着いた。士官と彼女がいそぐと手を取り合つて降りて行く後姿を見送り乍ら私は、「萬事休止」と吐き出すやうに云つた。

私は無事にU市に着いて軍務を完ふした翌日、顔馴染のM樓に行つて、久々に二三の友人と盃を交はした。その時遅れて来たKと云ふ中尉が今朝H町の郊外で某國士官が銃殺されて居たと云ふ報せをもたらした。それはT市から此のU市へ軍務を帯びて昨日夕方T市を立つて来たもので軍用書類はもとより、服も剣も奪ひ去られて、シャツとズボンだけの死體が川岸の草の中に横たはつてゐるばかりであつたと云ふのである。私は呪はしい豫感が遂に適中した事を知ると、あの便所の壁板にSPYと云ふ一字を書き残したことが今更口惜しくならなかつた。さうして華やかに笑ひ興じてゐた、あの青年士官の面影を思ひ浮べて、しんみりと盃を乾した。

私の首が五萬圓

私は性來酒飲みの素因を持つてゐる。私の父も母も、酒は嫌ひの方であつた。五人の兄弟の内、私ばかり酒を好むのは、きつと此の子は祖父に似たのだらうとよく父母は云つたものだ。好きではあるが量を多くやるのではない。盃を嘗めづる様にして長い時間に呑むのが好きであつた。ところが西伯利亞へ行つてからは、寒氣を凌ぐ一方法として、ぐいぐいと所謂あほる習慣がついてしまつた。一つは軍務の忙しさに、長時間味はふなど、云ふ悠長な眞似の出来なかつたと云ふ譯もある。従つて酒量も増して来た。殊に強烈な火酒をあほるのだから、日本酒やビールでは厭き足らなくなつて来た。不思議なことには私は未だ一度も泥酔と云ふ程度になつたことがない。私がR町の停車場司令官として赴任して来た時などは、百五十人からの土地の主なる人々の歓迎宴に一杯宛のビールを乾した數が、實に百五十杯——今から考へても嘘のやうな鯨飲をやつたけれど泥酔もせず體も毀さなかつた。私の酒量に就いては他人は勿論、私自身でさへ不思議に思ふ位である。